

学習指導要領解説

地域創造学編

平成31年3月

住田町教育委員会

まえがき

住田町は岩手県の南東部に位置する中山間地の町であり、人口5,500人ほどの豊かな自然に恵まれた地域である。かつて人口1万3,000人を超える時代もあったが、全国の中山間地と同様人口減少と高齢化の波には抗えないでいる。過疎化や後継者確保等の問題が以前にも増して顕著になってきており、地域の存続そのものが危ぶまれるようになって久しい。しかし、この地域で育まれた歴史、伝統、文化は厳然として残り、どんなに人が少なくなったとしてもこの地域はここにあり続ける。

時代の移り変わりは社会を大きく変え、経済的な右肩上がりの発展は過去のものとなった。AI やロボット(自動)化が進み、何十年か先には今ある仕事の半数はなくなっているだろうともいわれる。この先、子どもたちをどのような社会が待ち受けているか予見しにくい。これは都会も地方も同じである。

今まで私たちは、一つの答えをいかに早く正確に導き出すかに取り組んできた。しかしこれからは、正解のない問題を他者と力を合わせ解決にあたろうとする力が求められる。価値観が多様化する中、複数の正解がある社会に対応しなければならない。これからの子どもたちには、こうした新しい時代を切り拓き乗り越える力を身に付けることが求められている。

加えて、地方では地域を支える人材の育成が急務である。今まで地域を学ぶ取り組みは数多く行われてきたが、地域を支える人材を育成しようとする意図的な学習は稀だったように思う。「地域はそこにあり続ける」とすれば、それを担う人材がなければならない。学校教育にはそれをねらいとする教科が必要なのではないかと考える。

本町では、これからの社会を逞しく生きようとする子どもの育成と、地域を愛し、地域に誇りを持ち、地域を支えようとする心を育むために、文部科学省から研究開発学校の指定をいただき、教科としての「地域創造学」の開発に取り組むことにした。

本書は、研究開発学校として、中山間地域における教育の発展の方向性を5校で共有し、特色ある教育の実現に協力いただく全ての方々とその理念を分かち合い、未来の教育へと歩みを進めていくために町教育研究所が作成するものである。まだ緒に就いたばかりのものであるが、地域創造学を据えた教育課程の実施が、教育のより一層の充実へとつながるよう本書をご活用いただければ幸いである。

むすびに、本書「学習指導要領解説地域創造学編」の作成にご協力くださった全ての方に、心より感謝の意を表したい。

平成 31 年3月

住田町教育委員会
教育長 菊池 宏

目次

● 第1章 総説	1
● 第1節 すみたの教育理念	1
● 第2節 創設の経緯	3
● 第3節 地域創造学の意義	5
● 第4節 学びの5つのステージ	7
● 第2章 地域創造学の目標及び内容	9
● 第1節 地域創造学の目標	9
1 地域創造学で目指す横断的で探究的な学習活動	9
2 意図的・計画的に行うこと	10
3 新しい時代を切り拓き、社会を創造していくための社会的実践力	11
4 心豊かな人材を育成すること	12
● 第2節 地域創造学で育む社会的実践力	14
1 社会的実践力を構成する資質・能力	14
2 5つのステージに基づく社会的実践力の系統性	20
3 各教科等との汎用的な資質・能力	24
● 第3章 指導計画の作成	30
● 第1節 指導計画の方針	30
● 第2節 指導計画の構成	31
● 第3節 指導計画の作成にあたっての配慮事項	33
● 第4節 推進体制の確立	39
1 住田町における運営体制	39
2 各学校における推進体制	41

● 第4章 地域創造学の学習指導	43
● 第1節 児童生徒の主体性の重視	43
1 主体性を生み出す学習課題の設定	43
2 主体的な学びにつながる工夫	44
● 第2節 地域創造学の特性を生かした学習指導の展開	48
1 多様な学習展開の工夫	48
2 他地域や類似の事例にも学ぶ	49
3 多様な考えを生かす言語活動	50
4 家庭や地域社会との連携による指導	54
● 第5章 地域創造学の評価	56
● 第1節 評価の基本的な考え方	56
● 第2節 評価の方法及び工夫	58
1 児童生徒自身による学習評価	59
2 教師による評価	61
● 第3節 指導改善に生かす工夫と留意点	63

第1節 すみたの教育理念

1
住田の
教育理念

住田町があらゆる世代の人材育成のため、その風土を生かした教育を推進しようとする理念は、時代の変遷を経て今もなお、まちづくりの根幹として根付いている。昭和50年に制定された町民憲章には以下のように示されている。

町民憲章

わたくしたちは、豊かな緑の山々と清流気仙川をこよなく愛します。

そして、住田の風土の中で培われて来たかおり高い伝統と恵まれた自然を生かし、心をひとつにして、豊かで住み良い町をつくるため、ここに住田町民憲章を定めます。

- 1 わたくしたちは、ひとりひとりの創意と恵まれた資源を生かし、勤労を尊び、産業の振興にはげみ、豊かな町をつくります。
- 2 わたくしたちは、ひとりひとりの個性を生かしすすんで学習にはげみ、教養を高め知性と実行力を身につける教育の町をつくります。
- 3 わたくしたちは、ひとりひとりの真心を生かし幸せな生活ができるよう、互いにきまりを守り助け合い、健康で明るい町をつくります。

(昭和50年9月8日制定)

住田町の総合計画においても、「ひと・まち・しごとの創出で『住みたい町:すみた』の実現」を人口ビジョン・総合戦略の目標として掲げており、個性と創造性を発揮できる主体的な担い手の育成は、本町の究極の目標である。

住田町教育委員会では、策定した第9次住田町教育振興基本計画(平成30年度より5年間)の中で「生涯学び続け、新しい時代を切り拓く心豊かな人材の育

成」を基本目標として定めた。これは、「共生・協働」「自主・自立」を基本とし、夢・希望を持ち、生きがいのある人生の礎を築くまちの実現に向け、より豊かな人生や地域づくりを主体的に創造する生涯学習社会の構築を目指すため掲げたものである。学校教育においては、「知性と実行力のある心豊かでたくましい児童生徒の育成」を目指し、授業改善、安心・安全な学校生活の保障、家庭との連携を含む健康教育、社会人として自立する上で必要な能力の育成、特別支援教育等を指導方針に掲げた取組を行っている。グローバル化や、少子高齢化、生活意識の変化による価値観の多様化等、児童生徒を取り巻く環境が急速に変化する中、未来の町づくりへの指針やそれに向かう上での課題について、学校の教職員にとどまらず、町に関わる全ての人々と共有することで、中・長期的な展望に立った新たな価値創出の実現を可能とする教育の在り方について考えていく。

第2節 創設の経緯

2 創設の経緯

第1節の通り、住田町はその風土をいかし、地域の課題と向き合いながら人材の育成を図ることの重要性を教育理念として掲げている。この理念の実現を目指し、住田町では主に二つの特色ある教育活動の展開に積極的に取り組んできた。

一つ目は、「森林環境学習」に関する取組である。森林・林業との密接なつながりのある本町は、平成15年度から10年以上に渡り、幼児から高齢者まで年代に応じた「森林環境学習」を展開してきた。これは、生涯学習社会の構築を目標とする、本町の教育振興基本計画の中の特色ある取組のひとつである。小学校、中学校においては、「森林環境学習」を主に総合的な学習の時間の中で、発達の段階を考慮した様々な体験学習を実施してきた。幼児が参加する「森の保育園」では、町内唯一の県立住田高等学校の生徒が、ボランティアとして参加し、幼児との交流を深めキャリア教育のひとつとして実践している。

二つ目は「国際教育」に関する取組である。平成14年度より「国際社会の中の日本人としての自覚を持ち、主体的に生きていく人間の育成」を目指して、町独自に外国人教員を1名採用し、保育園から、小学校、中学校までの連続した国際理解活動及び英語活動を行っている。外国人講師の追加採用や、中高生の英語検定受検料の無料化を実施するなど、社会のグローバル化に伴う変化への対応について町独自の実践を展開してきた。

これらの取組は、一人一人の児童生徒が自分のよさや持ち味を發揮しながら意欲的に学習に取り組むことを通して、素直で心優しい心情や態度を育むとともに、学校と地域が協力しながら自然豊かな本町の風土を生かした学校教育を長きにわたり推進することができた。その一方で、これからの急激な社会変化を見据えたとき、児童生徒には、さらに社会と自分との関わりについて視点をもちながら、社会の中で生きる者として自分のよりよい生き方を志向する資質・能力の育成が一層求められ、その育成が急務であることが明白になった。

そこで、これまでの成果を踏襲しつつ、明らかになっている課題を改善するためにも、今後住田町教育委員会では、研究開発学校制度の指定を受け、地域に根付く特色ある産業や豊かな自然、人々の営み全てを教育資源として活用した学びの実現を、「新設教科 地域創造学を中核に据えた教育課程の実施」を通して図

ることとした。

地域資源を活用し、地域を学ぶことを通して社会参画の意義や社会と自分との関わり、そして自分自身の生き方へと考えを深めることができる地球創造学は、これまで推進してきた本町の学校教育の推進の充実を図ることに大きく寄与するものである。教職員でどのような児童生徒を育成していくのか、目指す児童生徒の姿を掲げ、これからの社会を生き抜く資質・能力を共有しながら一体的に推進する。「『すみたの教育』だからこそ展開できる」、「『すみたの教育』だからこそこれから目指す資質・能力が着実に身に付く」といった教育の在り方の中核となる教科として位置付けるものである。そのため、小学校、中学校、高等学校の12年間の育ちを一貫して見通した教育が必要であると捉え、全ての校種で地域創造学を中核とした教育課程を編成し、その検証を行いながら教育理念実現を目指すこととした。

研究開発指定期間は、目標の設定や単元開発といった地域創造学の構築を行うとともに、目指す資質・能力の定着についての実践検証等を組み立て、本町における特色ある教育課程の構築を行う。その後、『すみたの教育』の根幹として、持続可能な社会の担い手としての人材育成を目指した学校教育の役割を果たしていく。

第3節 地域創造学の意義

近年、内閣府による「Society5.0 に向けた人材育成」においても指摘されている通り、その地域に暮らす人間には、粘り強く主体的に仲間とコミュニケーションを図っていく姿勢や、地域づくりを実際に行う社会参画の場面において、「主体者」として考え・提案しようとする力など、未来にわたって発展していく社会を創造するには、様々な資質・能力が必要となる。共通して求められている力として整理されたもののうち、例えば「価値を見つけ生み出す感性と力、好奇心・探求力」は、自然体験や本物に触れる実体験を通じて醸成されたり、実践から学び自信につなげていくプロセスと関連したりするように、明らかに本町が目指してきた学校教育の考え方との共通性を持つものであるが、これまでの取組の継続だけで必要とされる資質・能力の育成を達成することは難しい。

AIやIoTにより情報や知識が共有される社会へのシフトと共に、少子高齢化や地方の過疎化等の課題を、イノベーションにより克服していくことのできるような準備が整っているか等、真剣に考えていかなければ、我々の郷土の持続に関わる程の重い課題がすぐそこまで迫っているのである。

この局面を乗り越えるために、本町の実状や抱えている課題を克服しながら、社会を創造する担い手として必要な資質・能力を具体的に明らかにし、それらを育む教育を推進する。そこで、育むべき資質・能力を具体的に明らかにし、町内の全小・中学校及び県立高校が一体となった教育課程を構築し、全町をあげた教育の展開を推進する。

前述の通り、本町は住みよい町づくりを目指して、その風土をいかし、地域の課題と向き合いながら人材の育成を図る教育理念の実現を目指し、学校教育においては特色ある教育活動を展開してきたところである。本町が、将来にわたって持続可能な町の姿を描きつつ、目指す資質・能力を獲得しながら自己の人生や社会を創造できる人材育成を目指す教育理念は、時代がどのように変化を遂げても不易な考え方である。

住田町の風土の中で培われて来た伝統や文化、恵まれた自然環境等の条件は、児童生徒が生まれながらにして親しみ、暮らしの中で触れて来た貴重な学習材である。地域資源を活用し、地域を学ぶことを通して社会参画の意義や社会と自分

との関わり、そして自分自身の生き方へと考えを深めることができる地球創造学は、これまで推進してきた本町の学校教育の推進の充実を図ることに大きく寄与するものである。

児童生徒には、さらに社会と自分との関わりについて視点を持ちながら、社会の中で生きる者として自分のよりよい生き方を志向する資質・能力の育成が一層求められることから、その方途として、地域資源を活用し、系統的に地域を学ぶ学習が有効であると考えた。住田の地域を学ぶことを通して、切実感のある喫緊の課題や未来の展望等の思いを巡らせながら学ぶカリキュラムの構築により、幼児教育と小学校の接続を含めた13年間の学習が、既存の総合的な学習の時間の枠組みを超えた資質・能力の育成に着実に結び付くものと捉えている。

また、地域創造学を教科として設定することは、住田で学ぶ児童生徒の目指す姿や地域の未来について、地域の人々とも共有して学ぶことが可能となり、学習活動を通して、地域のよさを認識し、地域への愛着を育みながら、児童生徒が社会に参画する機会を生み出すことにもつながる。

さらに、教育を推進する体制についても、住田町の学校と教育委員会とは、その距離の近さから、互惠性のある教育活動が展開できる関係にあり、これまでも成果を上げてきたことは前述の通りである。それに加え、教育研究所を運営母体として、保育園から高等学校までの先生方が、児童生徒のよりよい学習や育ち、身に付けている資質・能力を具体的に共有する場があり、校種を超えて一体的に取り組んでいくことができる。

第4節 学びの5つのステージ

4 学びの5つの ステージ

育成を目指す社会的実践力をより効果的に育てていくためには、校種を越えた町内の全教職員が、12年間の子どもたちの成長の姿を想定しながら指導に当たることが肝要である。地域創造学は、横断的で探究的な学習活動を意図的・計画的に行う教科である特性上、校種間、異校種間の接続を図ることは必須である。

特に、児童生徒の発達段階について、身体的発達と共に変化する認知的機能や情報処理と行動の連動など、発達の特徴を踏まえ、滑らかな接続を図り、着実に社会的実践力が育まれていくよう、保育園の年長児も含めた5つのステージのまとまりで編成した。これは児童生徒にとって、発達段階に応じて質の高い探究的な学習活動を保障し、その時期にふさわしい資質・能力を確実に身に付けていくことを意図しているものである。

第1ステージ: 保育園年長児, 小学校1年, 小学校2年

第2ステージ: 小学校3年, 小学校4年

第3ステージ: 小学校5年, 小学校6年, 中学校1年

第4ステージ: 中学校2年, 中学校3年, 高等学校1年

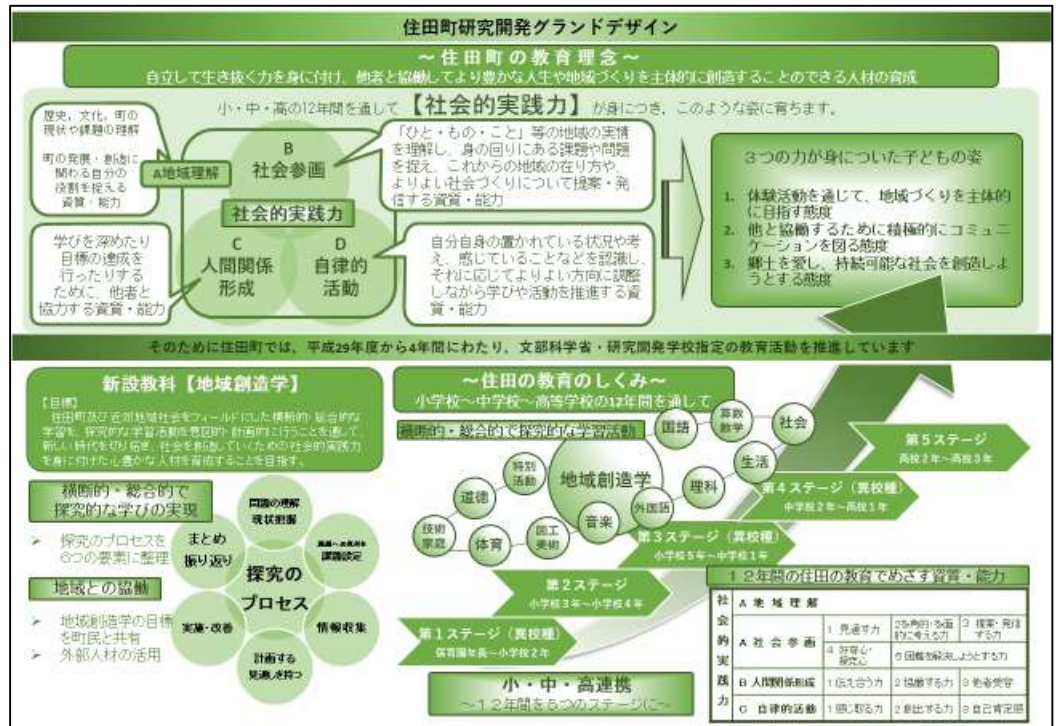
第5ステージ: 高等学校2年, 高等学校3年

一方、指導に当たる教職員の意識も、自分の校種や担当学年の指導に終始するのではなく、指導する側の意識改革が図られ、子供の学びの連続性や深化を視座に置いた学習活動の在り方に目を向けながら進めることができるメリットがある。幼児期から高等学校にかけて、非認知的能力と認知的能力のバランス良い育成のために、第1ステージから第5ステージまでの区切りによって、校種を見通して同じステージや前後のステージの中の学びを意識して指導することの重要性を重視している。

また、5つのステージの3-2-3-3-2年の区切りの設定は、児童生徒自身にとっても学校段階間の違いの影響が少なくなり、ステージ内の学年において学びの相互作用が効果的に生じ、自分自身の学習の成果等に関わるメタ認知をさ

らに高めることができると考える。

保育士、小・中学校、高等学校の教員が交流を図りながら実践に取り組んできた本町教育研究のあゆみを強みにして、このステージ設定による教育効果を最大限に引き出していく。



第2章

地域創造学の目標及び内容

第1節 地域創造学の目標

地域創造学における目標を掲げ、ねらいや育てようとする資質・能力を明確にし、その特質と目指す方向性を明確にした。地域創造学の目標は以下の通りである。

住田町及び近郊地域社会をフィールドにした横断的で探究的な学習活動を意図的・計画的に行うことを通して、新しい時代を切り拓き、社会を創造していくための社会的実践力を身に付けた心豊かな人材を育成することを目指す。

1 地域創造学の 目標

1 地域創造学で目指す横断的で探究的な学習活動

地域創造学における横断的で探究的な学習活動とは、本町の現状をふまえ、児童生徒が自ら課題意識を明確にもって課題を設定し、その解決に向かって、収集した情報や具体的な体験を基に、様々な気付きや思いを巡らせながら分析や考察を行い、自分の考えをまとめ、判断し、表現・発信する学習活動であり、物事の本質を見極めようとする学習そのものである。これは、地域の特色に応じた課題や、環境・国際理解・福祉・防災等の横断的な課題等、主として一つの教科等の枠組みに収まらない課題を取り上げて、多くの人々や事象とのかかわりの中で横断的で探究的な学習活動を展開するものである。

また、住田の地域資源を学習材として横断的で探究的な学習活動を通すことは、多くの人々や事象と関わりながら、自分の役割を自覚し、主体的で協働的に実践することの意義や有用感を味わうことにつながる。同時に、ふるさとを支える担い手として、児童生徒に望ましい資質・能力を醸成することにもつながる。

ここで重視している横断的で探究的な学習活動とは、直面している問題に対して、児童生徒が自分事として受け止め、よりよい解決に向かって積極的に自我関与しながら取り組もうとする主体性の上に、他者との協働的な学びを充実させながら、地域の活性化や発展につながる学習活動である。

新しい時代を切り拓くことにつながる社会の創造に向けた課題は、必ずしも唯一の答えが明確にあるものとは限らず、そのほとんどは、協働的な学びを通して対処しながら解決できたり、多様な考え方によって解決の道筋を見出せたりするものが多い。自他の思考や判断をまとめながら最適解や納得解を導き出していく過程が重要である。

このような探究活動を通して、主体的に学ぶ意味と自分の人生や社会の在り方を結び付けたり、多様な人との対話で考えを広げたり、各教科・領域等で身に付けた資質・能力を様々な課題の解決に生かすよう学びを深めたりすることが欠かせない。

また、PISA2015年調査では、読解力、数学的リテラシー、科学的リテラシーに加えて、協同問題解決能力を定義し、調査を実施している。協働問題解決能力とは、「複数人が解決に迫るために必要な理解と労力を共有し、解決に至るために必要な知識・スキル・労力を出し合うことによって問題解決しようと試みるプロセスに効果的に取り組むことができる個人の能力」と定義されている。この考え方は、地域創造学で重視している学習過程の考え方と重なるものである。このことを踏まえても、地域創造学における横断的で探究的な学習活動での協働的な学びは、個人の学習活動を支えるとともに、問題に対処し解決することができる能力の育成に不可欠な学習活動であることは明らかである。

このように、個と集団の相互作用のある横断的で探究的な学習活動だからこそ、自ら学び、考え、主体的に判断し、ふるさとのために自己を生かす資質・能力を培うことが可能である。人とのつながりや絆を感じ取り、望ましい集団を形成しながら、広い視野に立って、自分の役割や地域への貢献について思考・判断し、実践していく態度や、よりよい自分自身の生き方を志向する心情を育てていくことができる。併せて、自ら学び、自ら考える力を高めながら、他者と協働して身近な地域社会の課題解決に主体的に参画し、その発展に貢献しようとする態度にもつながるものであり、児童生徒にとっても、これからの自分自身の在り方に直結する意味のある学習活動である。

2 意図的・計画的に行うこと

前述の本町の教育理念に基づき、幼児教育との円滑な接続を含めて、年長児

から高等学校の13年間を一貫させた教育課程編成のもと、発達段階を踏まえた学びのステージに沿って、住田の地域資源等の学習内容を系統的に学ぶことができるよう、意図的・計画的な指導計画に基づき実施するものである。

「意図的」とは、その時期だからこそ学ぶ意義や価値が大きい学習内容を、ふさわしい学びのステージに位置付けることである。「計画的」とは、学習内容のつながりや学習方法や児童生徒の資質・能力の系統性を吟味して位置付けることである。このような考え方に立って作成した指導計画に基づき、地域創造学を展開することは目標を達成する上で欠かせないものである。

意図的・計画的な指導計画に基づき、ふるさと住田の伝統や文化の継承、文化の創造の担い手として、自分の生まれ育った地域への自信と誇りを胸に生きていく人間に育てることを目指す。

具体的な学習内容については第三節で詳述するが、例えば、「住田の産業を通してこれからの町づくりを考え、発信する学習」、「住田町のよさや抱えている課題を学び、実践的な行動を通して地域へ貢献する学習」、「住田固有の有形無形の文化遺産や、先人の残した優れた文化的業績の価値を享受する学習」、「住田と世界のつながり等に目を向ける国際理解に関する学習」、「地域の中でふるさとの発展のために力を注ぐ人々から生きることや働くことの意味を学ぶ学習」、「学校や地域が一体となって取り組む活動へと発展的に広がる学習」等、様々な学習内容が考えられる。

そこで、住田町及び近郊社会をフィールドにした豊富な地域資源を教材化し、意図的・計画的な学習を通して、改めてふるさと住田を見つめ、よさを捉え直し、地域社会における文化の創造と発展に貢献できる能力や、前向きな姿勢で夢や希望を持ち、よりよい生き方を志向しながら実践的に行動しようとする態度を養うことを目指していく。

3 新しい時代を切り拓き、社会を創造していくための社会的実践力

地域創造学を通して育む社会的実践力とは、以下の通りである。

【社会的実践力】

児童生徒が変化の激しい社会において、充実した人生を実現するために、豊かな心を持ち、主体的に未来社会を創造していくことができる力

社会的実践力の育成は、地域創造学が中核となってその役割を果たすものである。前項で述べたように、自ら設定した課題に関して、自分なりに解決や望ましい在り方など、納得できる答えを選択したり判断したりするような横断的で探究的な学習活動を通して、社会的実践力は育成されていく。

様々な人と関わり、協働的に学ぶことを通して、児童生徒は人とのつながりや絆を感じ取り、望ましい集団を形成しながら自分のよさや可能性を伸ばすことが可能になる。そして、児童生徒自身が、力を合わせて取り組むことの大切さや心地よさを味わい、地域の社会活動への参画や地域社会への貢献に対するやりがいや喜びなどを実感することによって、目指す社会的実践力が着実に育まれていくのである。

社会的実践力については、次節で詳述する。

4 心豊かな人材を育成すること

このような社会的実践力を身に付けながら、児童生徒は、協働的に学ぶことの意義や有用感をとらえ、社会を形成する担い手としての自分を見つめていくのである。児童生徒一人一人が自分や周りの人々のよさに気づき、共感し、助け合い、認め合い、高め合おうとする心情を醸成するとともに、集団における一人一人のよさや持ち味、特性といった個性の伸長が図られ、集団における自分の役割を果たそうとする強い意志や態度が育まれる。そして、よりよい生き方や人間としての在り方や生き方を問い続け、よりよく生きたいという願いを求め、実践しようとする。

よって、地域創造学を通して自分自身の生き方を考える際には、次の3点を大切に
する。

まず、地域創造学の学習を通して、児童生徒が自分の生活や行動について考えて
いくことである。学習を振り返りながら、社会や自然の一員として、これから何をどのよう
にすべきかについて具体的に考えることである。

次に、取り組んだ学習活動を通して、児童生徒が自分にとって学ぶ意味や価値を考えていくことである。自分の考えや意見を深めることであり、学習の有用感や達成感を振り返りながら学んだことの意味を自覚することである。いろいろな考えやものの見方に触れたよさや、他者とともに取り組むことの大切さ、やりがいや喜びなどを具体的に自覚させたい。

そして、児童生徒が自分の生活や行動について考えたことと、自分にとって学ぶ意義や価値について考えたことを基に、学んだことを現在及び将来の自己の生き方についてつなげて考えることである。学習の成果から達成感や自信を持ち、自分のよさや可能性を捉え、自分の人生や将来といった自分の生き方への展望を考えていくことである

このように、地域創造学では、何のために学ぶのかという学習の意義や目標を共有しながら、社会の一員として多くの人々と手を取り合い、地域社会・世界と関わって自分の生き方を歩むことができるような児童生徒を育てる。学ぶことと生きることとの関連付けをしながら、地域社会の中での他者とのかかわりを大切に受け止めて、自分の責任ある役割を理解し、自己を生かし高めようとする向上心を育み、心豊かな人材を育てていく。

第2節 地域創造学で育む社会的実践力

1 社会的実践力を構成する資質・能力

地域創造学を通して育む社会的実践力(児童生徒が変化の激しい社会において、充実した人生を実現するために、豊かな心を持ち、主体的に未来社会を創造していくことができる力)は、地域資源を学習材として横断的で探究的な学習活動を通して育成されることから、様々な資質・能力が螺旋的に関わり合いながら培われ、児童生徒が獲得していく資質・能力であると捉えている。

そこで、このような考え方のもと、社会的実践力として形作られていく様々な資質・能力を明らかにし、12の資質・能力として規定した。

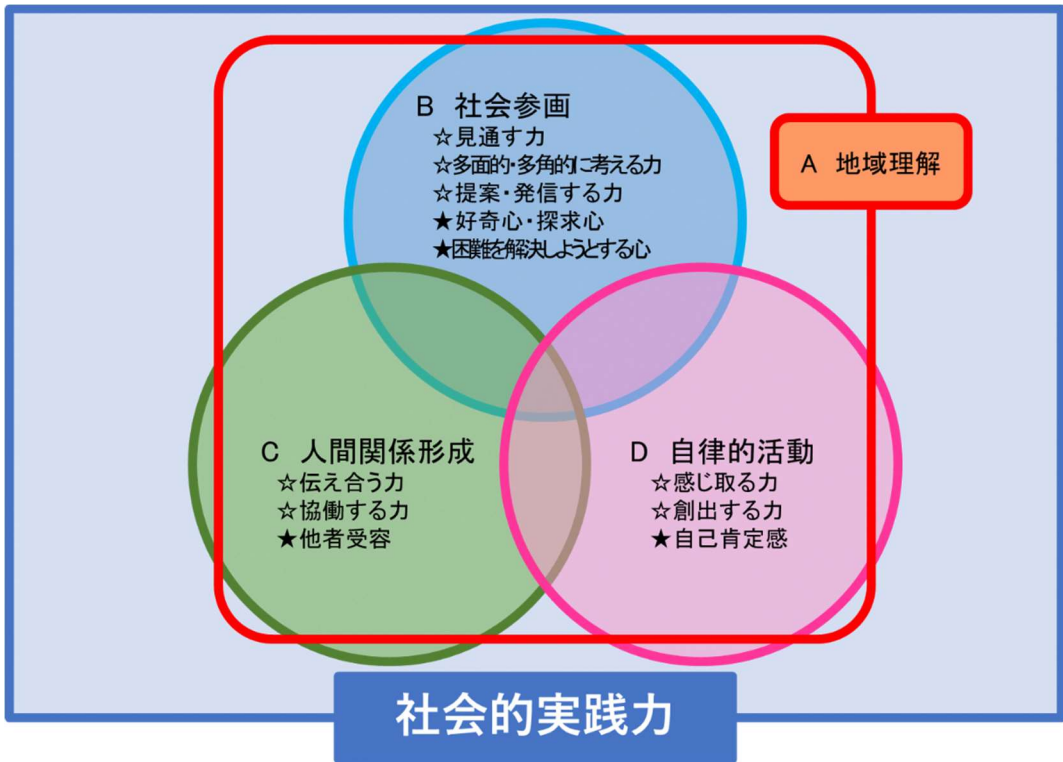
これらの12の資質・能力については、「地域創造学においては何を理解して何ができるようになるか」という知識・技能に相当するもの、汎用的スキルに相当するもの、態度・意欲・学びの価値に相当するものなどに明確化した。そして、知識・技能に相当する資質・能力を「地域理解」と規定し、これ以外の11の資質・能力を「社会参画に関する資質・能力」、「人間関係形成に関する資質・能力」、「自律的活動に関する資質・能力」という大きく3つの側面から分類して整理した。

さらに、これらの11の資質・能力については、汎用的スキルに相当するもの(☆で表示)として7つの資質・能力(見通す力、多面的・多角的に考える力、提案・発信する力、伝え合う力、協働する力)を位置付け、態度・意欲・学びの価値に相当するもの(★で表示)として4つの資質・能力(好奇心・探究心、困難を解決しようとする心、他者受容、自己肯定感)を位置付けた【表2-2-1】。

社会的 実践力	A 地域理解		他 教 科 等 の 汎 用 性
	B 社会参画に関する 資質・能力	☆見通す力	
		☆多面的・多角的に考える力	
		☆提案・発信する力	
		★好奇心・探究心	
	C 人間関係形成に関する 資質・能力	☆伝え合う力	
		☆協働する力	
		★他者受容	
	D 自立的活動に関する 資質・能力	☆感じ取る力	
		☆創出する力	
		★自己肯定感	

【表2-2-1】地域創造学で育む社会的実践力を形作る12の資質・能力

また、地域創造学で育む社会的実践力を形成している資質・能力は、それぞれ独立して育成されるものではなく、地域理解の資質・能力と相互に関連付けられ、重なり合いながら育成される資質・能力である【図2-2-1】。



【図2-2-1】地域創造学で育む社会的実践力を形成している資質・能力の関連

A 地域理解

これは、自分たちの歴史や文化、現状や抱えている課題、活用資源を理解し、ふるさとに愛着をもちながら町の発展・創造に関わる自分の役割を捉える資質・能力である。

「地域理解」は、地域創造学の学習を通して児童生徒が獲得したり強化したりする「地域に関する知識・技能」である。これは、地域創造学の学習の前提として、どれだけ地域の様々な事柄や情報を知識として知っているか(習得しているか)ということをも求めているものではない。例えば、課題設定では、普段の生活の中で見聞きし知っていることから課題意識が醸成される場合もあるが、ある事象に直面して調べたり情報を集めたりする段階で初めて地域のことについて知り、課題を見つけていく場合もある。また、取り上げられている地域資源が同一であっても、探究的な学習活動の中で多面的・多角的な見方や考え方をすることにより、取り上げられている地域資源に対する認識や理解は、広がりや深まりのある分かり方となる場合もある。

この「地域理解」の資質・能力は、学年が進むにつれて、これまで培われてきた「地域理解」の資質・能力を駆使しながら、探究的な学習活動の中で習得や活用が繰り返され、他の資質・能力と関連付けられて獲得されたり強化されたりする。地域の様々な物事が分かることに留まらず、取り囲んでいる状況や立場をも受け止める共感や尊重といった情緒的な理解や、情緒的な関わりの中で育まれる地域への愛着といった側面も含め、螺旋的・反復的に鍛えられていく資質・能力である。

そもそも自分が生まれ育った地域は、自己形成に大きな役割を果たすと同時に、生涯にわたる心の拠り所であり、精神的な心の支えとなる存在である。誇るべき尊いふるさと住田の伝統や文化を育て、守り育ててきた先人の偉業、住田ならではの地域社会のよさ、自然と共存しながら生きる産業の発展等を探究的に学びながら、住田町の発展と未来への創造に関わる自分の役割や使命、自分の生き方を捉えることができるようにする。

この「地域理解」は、自分の生まれ育った地域について、生き生きと自分の思いや考えを語り、そして、自分の役割や自分自身の生き方を前向きな気持ちで語り歩もうとする本町の児童生徒を育む土台となる重要な資質・能力として位置付くものである。

B 社会参画に関する資質・能力

社会参画に関わる資質・能力として、「ひと・もの・こと」等の地域の実情を理解し、身

の回りにある問題や課題を捉え、これからの地域の在り方やよりよい社会づくりについて提案・発信することに関わる資質・能力を位置付ける。地域の実情から問題をとらえ、解決すべき課題を設定し、よりよい解決や目指す地域の在り方等に向けて、提案・発信するという探究的な学習活動を通して育成されるため、探究的な学習活動を推進する際に求められる資質・能力を中心に分類した。

具体的には、「☆見通す力」、「☆多面的・多角的に考える力」、「☆提案・発信する力」、「★好奇心・探究心」、「★困難を解決しようとする心」の5つの資質・能力を位置付けた。

見通す力とは、自分や集団にとっての問題や課題を発見し、その要因や解決方法を見出す問題発見力である。必要に応じて仮説を立てながら、目標達成に向けて解決の道筋を計画したり、その見通しに沿って、収集した情報を適切に活用したりすることを目指している力である。

多面的・多角的に考える力とは、根拠を明確にしながらか々な見方や考え方で検討する力である。考えや解釈の妥当性を考えたり、結果を予測しながら判断したりすることを目指しており、批判的思考力と密接に関わるものである。

提案・発信する力とは、地域への愛着をもち、よりよい社会づくりに向けた取組を提案する力である。新しい視点や価値観が盛り込まれたよりよい社会づくりに向けた取組は意義のあるものであり、これからの町づくりに関わって、自分たちの考えや解決策について効果的な発信方法を検討できる力を目指している。

好奇心・探究心とは、児童生徒の身の回りや地域の事象に興味関心を持つ心情や態度を指している。課題の解決に向けてもっと知りたいと思う心情や、解決したいことを見つけようとする姿勢として表れる。

困難を解決しようとする心とは、失敗してもあきらめずに挑戦しようとする心や、困難な場面に直面しても粘り強く取り組み、最後までやり遂げようとする姿勢や態度である。これは社会参画につながる様々な取組への達成感ややりがいといった学びの価値を味わうことによって、更に高められていく資質・能力である。

C 人間関係形成に関する資質・能力

人間関係形成に関する資質・能力として、学びを深めたり、目標の達成を行ったり

するために、他者と協力することにつながる資質・能力を位置付ける。探究的な学習活動において展開される協働的な学びと深く関連のある資質・能力である。

自分を取り巻く他者、集団、社会とのかかわりの中で、望ましい人間関係の形成を目指すものである。多様な人々とのかかわりを通して、時と場に応じて他者を受容する等、相互理解へとつながるコミュニケーション能力とともに、地域貢献の取組や自治的活動等により協働的に物事に取り組み、その中での自分の役割を捉え、よりよい生活を築こうとする態度の形成にもつながる資質・能力である。

ここには、「☆伝え合う力」「☆協働する力」「★他者受容」の三つの資質・能力を位置付けた。

伝え合う力とは、気持ちや感じたこと等を伝える力が土台となるものであり、人間と人間との関係の中で、互いの立場や考えを尊重し、言語を通して正確に理解したり適切に表現したりする力である。様々に伝え方を工夫する力も含むものであり、双方向性のある資質・能力である。

協働する力とは、よりよい社会づくりや社会参画といった目標達成に向けて、他者と協力して活動することができる力である。具体的には、一人一人がよりよい解決に向かって、個性を発揮しながら、議論し合ったり、集団活動を統制したりする力である。これは、自分の役割や責任を自覚しながら、探究的な学習の質を向上させ、児童生徒が学習のよさや価値を感得することにもつながるものである。

他者受容とは、多様な他者の考えや価値観、態度を受け入れる態度や、相手を尊重したり敬意を抱いたりする心情である。互いの気持ちや考えを伝え合う中で、互いの立場を尊重し、認め合うことは、自分の見方や考え方が広がるだけでなく、人と関わる心地よさを味わいながら、寛容の心をもって謙虚に周囲から学ぼうという心情も育まれる。

D 自律的活動に関する資質・能力

自律的活動に関する資質・能力として、自分自身の置かれている状況や考え、感じていることなどを認識し、それに応じてよりよい方向に調整しながら、学びや活動を推進する力に関わる資質・能力である。

これは、自分の考えの深浅や妥当性、感じている事柄などを、状況に応じて軌道修

正や調整をしながらよりよく自己更新して取り組もうとする資質・能力でもある。時に自分の考え方や学び方を客観的に捉えながら、自己省察して、今までの学び方を修正・転換したり、建設的な考えを模索しようとしたりする力である。これは、自分自身について考えることや自分のよさや可能性を捉えることにつながり、一人一人の生き方のみならず、地域社会を根底で支えていく原動力にもなる。

この資質・能力として、「☆感じ取る力」「☆創出する力」「★自己肯定感」の3つの資質・能力を位置付けた。

感じ取る力とは、自己の現在の進捗状況を見つめ、考えや発想、思いを自分自身で捉えたり、捉え直したりして、自分の学びや活動をよりよいものに調整しようとする力である。自分の考えたことやその思考過程等、様々な観点から振り返り、別の解決策や想定される事柄を批判的に評価する力であり、この資質・能力の育成は、主体的に学ぼうとする意欲や態度、探究的な学習活動における問題解決能力の向上につながるものである。

創出する力とは、児童生徒が会う「ひと・もの・こと」に触れて面白さや楽しさ、よさを感じ、自分の感性を十分に働かせながら自分なりに表現する力である。併せて、新しい表現を生み出したり、創造的に表現したりする力でもある。

自己肯定感とは、最後までやり遂げた達成感を味わいながら、自分自身の成長やよさを捉える心情である。自分の可能性を前向きに受け止め、よりよいもの・より高いものを目指して取り組もうとする態度通して表出される。

学びの過程や活動を省察する感じ取る力と密接にかかわりながら、育まれる資質・能力である。

以下【表2-2-2】は、これまで述べてきた社会的実践力を構成する12の資質・能力の捉えと分類について整理したものである。

第2章
地域創造学の
目標及び内容

【社会的実践力】児童生徒が変化の激しい社会において、充実した人生を実現するために、豊かな心を持ち、主体的に未来社会を創造していくことができる力		
☆ 汎用的スキル ★ 態度・意欲・学びの価値		
A 地域理解	自分たちの地域の歴史や文化、現状や抱えている課題、活用資源を理解し、ふるさとに愛着をもちながら町の発展・創造に関わる自分の役割等を捉える。	
B 社会参画に関する資質・能力 「ひとものこと」等の地域の実情を理解し、身の回りがある課題や問題を捉え、これからの地域の在り方や、よりよい社会づくりについての提案・発信に関する資質・能力	1 ☆見通す力 【☆見】	自分や集団にとっての課題や問題を発見し、その解決方法を見いだす問題発見力。情報を適切に活用する力。目標の達成に向かって解決の道筋を見通し計画する力。
	2 ☆多面的・多角的に考える力 【☆多】	根拠を明確にしながら様々な見方や考え方で検討する力。批判的思考力。考えや解釈の妥当性を考える力。予測し判断する力。
	3 ☆提案・発信する力 【☆提】	地域への愛着を持ち、よりよい社会づくりに向けた取組を提案する力。解決策や考えたことについて効果的な発信方法を考える力。新しい視点や価値観を生み出す力。
	4 ★好奇心・探究心 【★好】	身の回りや地域の事象に興味関心を持つ態度。もっと知りたいと思う心。知りたいことや解決したいことをみつけようとする姿勢。
	5 ★困難を解決しようとする心 【★解】	失敗してもあきらめずに挑戦しようとする心。集団の仲間とともに困難な場面に直結しても粘り強く取り組み、最後までやり遂げようとする姿勢。
C 人間関係形成に関する資質・能力 学びを深めたり、目標の達成を行ったりするために、他者と協力することに資する資質・能力	1 ☆伝え合う力 【☆伝】	調べたことや自分の考えを伝える力。視覚的に伝え方を工夫する力。気持ちや感じたことなどを伝える力。双方向的に伝え合う力。
	2 ☆協働する力 【☆協】	目標達成に向かって、他者と協力して活動できる力。議論し合ったり、集団活動を統制したりする力。
	3 ★他者受容 【★受】	多様な他者の考えや価値観、立場を受け入れる態度。相手を尊重したり敬意を抱いたりする心。
D 自律的活動に関する資質・能力 自分自身の置かれている状況や考え、感じていることなどを認識し、それに応じてよりよい方向に調整しながら学びや活動を推進することに資する資質・能力	1 ☆感じ取る力 【☆感】	自己の現在の姿を見つめる力。考えや発想、思いを自分自身で捉えたり、捉え直したりして、これからの自分の学びや活動をよりよいものに調整しようとする力。
	2 ☆創出する力 【☆創】	出会う「ひとものこと」に触れて面白さや楽しさ、よさを感じ、自分なりに表現する力。新しい表現の仕方を生み出したりする力。
	3 ★自己肯定感 【★肯】	学びの過程や活動を省察したり、最後までやり遂げた達成感を味わったりしながら自分のよさを捉える心。自分の可能性を前向きに受け止め、より高いもの・よりよいものを目指して取り組もうとする態度。

【表2-2-2】 社会的実践力のとらえ(社会的実践力を構成する資質・能力の分類)

以上、社会的実践力の育成につながるこれらの12の資質・能力は、前述の通り、地域創造学を柱とした12年間の教育課程の下、横断的で探究的な学習を通して育成されていく。他教科等との学習と相互に関連付けながら、児童生徒がこれから歩いていく社会を生き抜くために、自分と他者とのかかわりの中で、未知の状況において発揮され、生きて働くものとして、社会的実践力が形成されていくことが重要である。

2 5つのステージに基づく社会的実践力の系統性

小学校から高等学校までの12年間を、発達段階を踏まえ5つのステージに設定していることについては、前章においてその基本的な考えを示している。

12年間を通して、町全体で目指す児童生徒の育ちの姿を俯瞰しながら、地域創造学で育てたい資質・能力の確実な育成に向け、5つのステージにおける目指す資質・能力についてその系統性を明らかにした【表2-2-3】。

この社会的実践力の育成については、各ステージにおける発達段階に応じた学びの様相としてまとめているものであり、到達目標という意味合いではなく、児童生徒の

学びの姿の目安として整理している。この系統性については、以下の7点を配慮して整理している。

- * 社会的実践力を構成している資質・能力は、いわゆる非認知的能力と認知能力を分類し、規定しているものである。したがって、12年間をとおして、非認知的能力と認知能力のバランスのよい育成を目指すことは、社会的実践力の育む上で必要な考え方である。よって、学びの出発点を幼児教育と小学校教育の円滑な接続が図られるように、年長児も含めた形で整理している。
- * 幼児教育は発達を視座にし、遊びを中心に据えた環境を通じた教育が中心である。この中で、学びに向かう力(自己主張、自己抑制、協調性、好奇心などに関係する力)といった非認知的能力が育まれる。この学びに向かう力は、文字や数、思考の育ちに関連があり、非常に重要な能力として発揮されていくものである。したがって、第1ステージ(年長～小学校2年)の学習活動では、具体的な体験活動を通して、自分なりの知や意味付けしながら、体験や実践による知を構成していくことができるようにする。「為すことによって学ぶ」ことそのものである。このような学習活動の積み重ねが第1ステージにおいては重要であり、幼児教育と小学校教育の円滑な資質・能力を繋ぐ学びへと移行することにつながる。自分の思いや願いが解決の目的や課題となって、活動を展開しながらトライアンドエラーといった試行錯誤を繰り返したり、粘り強く取り組んだり、自分なりの見通しをもってやり遂げたりする学習の充実が重要である。
- * 「B 社会参画に関する資質・能力」については、特に、探究的な学習活動において働き、認知能力と密接に関係がある。具体的な思考から抽象的な思考が可能となる発達段階を意識した整理をしている。
- * 見通す力(B-1)については、主に中学校2年以降、様々な現状分析を基に課題を設定し、解決までの過程を見通しながら具体的な解決を実現する学習を積

み重ねることが重要であり、学習の質を高めていく時期として、第4・5ステージをひとまとまりにしている。

- * 多面的・多角的に考える力(B-2)については、第1ステージ、第2・3ステージ、第4・5ステージと3つのまとまりにしている。これは、第1ステージは具体的な体験活動を通した学びの中に表出されてくるものであること、第2・3ステージは、小学校高学年に向かって育つ抽象的な思考が可能となる発達段階を踏まえ、比較すること、関係付けること、予想や仮説を立てて解決方法を発想すること、多面的に考えることといった学習活動を通して、育成したい資質・能力を育むものである。そして、第4・5ステージは生徒自らが問題をとらえ、根拠のある課題を設定し、規則性や関係性、共通点や相違点、関係性を見出して表現するといった分析・解釈の探究のプロセスを踏まえて育成される資質・能力としている。
- * 提案・発信する力(B-3)は第4・第5ステージをまとまりとしている。これは、学年が進むにつれて、自分たちが解決した事柄を基に、より妥当な考えを創り出したり、分析して解釈したことを効果的に発信したりする学びが質的に高まっていくことを踏まえたものである。
- * 好奇心・探究心(B-4)及び困難を解決しようとする心(B-5)を第1・2ステージでひとまとまりにしている。これは、第3ステージ以降の学びを支えていく非認知的能力であり、幼児教育から小学校低学年の学びと、小学校低学年の学びから問題解決型学習が充実する小学校中学年の学びをとおして着実に育む必要がある。これらの資質・能力の育成が、第3ステージ以降の学習で存分に発揮され、鍛えられていくように捉えた。

☆ 汎用的スキル ★ 態度・意欲・学びの価値

資質・能力の種類	A~Dに関する資質・能力その定義			第1ステージ	第2ステージ	第3ステージ	第4ステージ	第5ステージ
	要素	小1	小2					
A 地域理解 自分たちの地域の歴史や文化、現状や抱えている課題、活用資源を理解し、ふるさとに愛着をもちながら町の発展・創造に関わる自分の役割等を捉える。	【☆ 関】	身近なひとともの、こととの関わりを通して、自分たちの住んでいる場所のよさとして変化し続けること、土地に積極的に関わることを進めようとする。	地域の人の書きし、生活の知恵や伝統や文化を受け継ぐこと、土地に積極的に関わることを進めようとする。	地域の歴史、文化、産業、先人などに関する往古より現代に至るまでを時代ごとに整理し、地図や写真などを使いながら、より身近に感じることができようとする。	地域の歴史、文化、産業、先人などに関する往古より現代に至るまでを時代ごとに整理し、地図や写真などを使いながら、より身近に感じることができようとする。	地域の歴史、文化、産業、先人などに関する往古より現代に至るまでを時代ごとに整理し、地図や写真などを使いながら、より身近に感じることができようとする。	地域の歴史、文化、産業、先人などに関する往古より現代に至るまでを時代ごとに整理し、地図や写真などを使いながら、より身近に感じることができようとする。	地域の歴史、文化、産業、先人などに関する往古より現代に至るまでを時代ごとに整理し、地図や写真などを使いながら、より身近に感じることができようとする。
B 社会参画に関わる資質・能力	1 ☆見通す力 2 ☆多面的・多角的に考える力 3 ☆提案・発信する力 4 ☆好奇心・探究心 5 ☆困難を解決しようとする心	【☆ 関】 自分や仲間といった様々な人々の関わりや活動に関わり、課題を解決しようとする。	【☆ 関】 自分や仲間といった様々な人々の関わりや活動に関わり、課題を解決しようとする。	【☆ 関】 自分や仲間といった様々な人々の関わりや活動に関わり、課題を解決しようとする。	【☆ 関】 自分や仲間といった様々な人々の関わりや活動に関わり、課題を解決しようとする。	【☆ 関】 自分や仲間といった様々な人々の関わりや活動に関わり、課題を解決しようとする。	【☆ 関】 自分や仲間といった様々な人々の関わりや活動に関わり、課題を解決しようとする。	【☆ 関】 自分や仲間といった様々な人々の関わりや活動に関わり、課題を解決しようとする。
C 人間関係形成に関する資質・能力	1 ☆伝え合う力 2 ☆信頼する力 3 ☆他者受容	【☆ 関】 地域の人々や仲間、身近な人々や活動に関わり、課題を解決しようとする。	【☆ 関】 地域の人々や仲間、身近な人々や活動に関わり、課題を解決しようとする。	【☆ 関】 地域の人々や仲間、身近な人々や活動に関わり、課題を解決しようとする。	【☆ 関】 地域の人々や仲間、身近な人々や活動に関わり、課題を解決しようとする。	【☆ 関】 地域の人々や仲間、身近な人々や活動に関わり、課題を解決しようとする。	【☆ 関】 地域の人々や仲間、身近な人々や活動に関わり、課題を解決しようとする。	【☆ 関】 地域の人々や仲間、身近な人々や活動に関わり、課題を解決しようとする。
D 自律的活動に関わる資質・能力	1 ☆感じ取る力 2 ☆創出する力 3 ☆自己肯定感	【☆ 関】 自分や仲間といった様々な人々の関わりや活動に関わり、課題を解決しようとする。	【☆ 関】 自分や仲間といった様々な人々の関わりや活動に関わり、課題を解決しようとする。	【☆ 関】 自分や仲間といった様々な人々の関わりや活動に関わり、課題を解決しようとする。	【☆ 関】 自分や仲間といった様々な人々の関わりや活動に関わり、課題を解決しようとする。	【☆ 関】 自分や仲間といった様々な人々の関わりや活動に関わり、課題を解決しようとする。	【☆ 関】 自分や仲間といった様々な人々の関わりや活動に関わり、課題を解決しようとする。	【☆ 関】 自分や仲間といった様々な人々の関わりや活動に関わり、課題を解決しようとする。

2 地域創造学で育む社会的実践力

【表2-2-3】各ステージにおける社会的実践力

資質・能力の種類	第1ステージ	第2ステージ	第3ステージ	第4ステージ	第5ステージ
A 地域理解	身近なひとともの、こととの関わりを通して、自分たちの住んでいる場所のよさとして変化し続けること、土地に積極的に関わることを進めようとする。	地域の人の書きし、生活の知恵や伝統や文化を受け継ぐこと、土地に積極的に関わることを進めようとする。	地域の歴史、文化、産業、先人などに関する往古より現代に至るまでを時代ごとに整理し、地図や写真などを使いながら、より身近に感じることができようとする。	地域の歴史、文化、産業、先人などに関する往古より現代に至るまでを時代ごとに整理し、地図や写真などを使いながら、より身近に感じることができようとする。	地域の歴史、文化、産業、先人などに関する往古より現代に至るまでを時代ごとに整理し、地図や写真などを使いながら、より身近に感じることができようとする。
B 社会参画	自分や仲間といった様々な人々の関わりや活動に関わり、課題を解決しようとする。	自分や仲間といった様々な人々の関わりや活動に関わり、課題を解決しようとする。	自分や仲間といった様々な人々の関わりや活動に関わり、課題を解決しようとする。	自分や仲間といった様々な人々の関わりや活動に関わり、課題を解決しようとする。	自分や仲間といった様々な人々の関わりや活動に関わり、課題を解決しようとする。
C 人間関係形成	地域の人々や仲間、身近な人々や活動に関わり、課題を解決しようとする。	地域の人々や仲間、身近な人々や活動に関わり、課題を解決しようとする。	地域の人々や仲間、身近な人々や活動に関わり、課題を解決しようとする。	地域の人々や仲間、身近な人々や活動に関わり、課題を解決しようとする。	地域の人々や仲間、身近な人々や活動に関わり、課題を解決しようとする。
D 自律的活動	自分や仲間といった様々な人々の関わりや活動に関わり、課題を解決しようとする。	自分や仲間といった様々な人々の関わりや活動に関わり、課題を解決しようとする。	自分や仲間といった様々な人々の関わりや活動に関わり、課題を解決しようとする。	自分や仲間といった様々な人々の関わりや活動に関わり、課題を解決しようとする。	自分や仲間といった様々な人々の関わりや活動に関わり、課題を解決しようとする。

この表は、各ステージにおける社会的実践力の育成を目指すための参考となるよう記載されています。各学校・地域の状況に応じて、適切な活用をお願いします。

3 各教科等との汎用的な資質・能力

地域創造学で育む社会的実践力を支える資質・能力のうち、「B 社会参画に関わる資質・能力」「C 人間関係形成に関わる資質・能力」「D 自律的活動に関わる資質・能力」の11の資質・能力(汎用的スキル及び態度・意欲・学びの価値)は、各教科等においても育まれる関連能力である。そのため、地域創造学を中核として育成しつつも、各教科等の学習においても関連性を捉えながら培っていくようにするものである。

2016 東京学芸大学・次世代教育研究推進機構(NGE)「OECDとの協働による次世代対応型指導モデルの研究開発」プロジェクトの報告によると、研究成果を基に、以下の6点の基本的な考え方を見出している(以下6点引用)。

- ① 汎用的スキルや態度・価値は、全ての教科等が協働して育成できる
- ② それぞれの汎用的スキルや態度・価値には、その育成がしやすい教科等とそうでないものがある
- ③ 育成される汎用的スキルや態度・価値の内容は、同じ名称でも教科等によって異なる特徴をもつ
- ④ ある特性の汎用的スキルや態度・価値は、さまざまな教科等で育成された多様な力の総合としてとらえることができる
- ⑤ ある特性の汎用的スキルや態度・価値は、授業の中で単独に育成される訳ではなく、それらの相互作用によって育成されていく
- ⑥ 知識、汎用的スキル、態度・価値の育成を展開していくには、深い学び、対話的な学び、主体的な学びが必要である

本町で育成を目指す社会的実践力を支える資質・能力のうち、「B 社会参画に関わる資質・能力」「C 人間関係形成に関わる資質・能力」「D 自律的活動に関わる資質・能力」の11の資質・能力は、上記NGEの考え方と同様に、地域創造学の学習と各教科等の学習において往還するものであり、学習の中で発揮されることにより、また鍛えられていく資質・能力であると捉えている。

そこで、児童生徒の学習全体を通して有機的に育成できるよう、各教科等と11の資質・能力との関連を明らかにし、特に関連の強いものを◎印、関連のあるものに○印、

関連が薄いものは空欄で表し、学年ごとに「教科関連検討表」としてまとめた【表2-2-4(1)~(6)】。

2
地域創造学で
育む社会的
実践力

資質・能力の分類	定義	A~Cに関する各資質・能力	創造	幼児教育	国語	社会	算数	理科	生活	音楽	図工	家庭	体育	道徳	外国語	特活	
A. 社会参画力	「ひと・もの・こと」等の地域の実情を理解し、身の回りにある課題や問題を捉え、これからの地域の在り方や、よりよい社会づくりについて提案・発信する資質・能力	1. 地域理解	◎		○						○			○			
		2. 見通す力	◎		○		◎						○			○	
		3. 多面的・多角的に考える力	◎		○		○					○		○	◎		○
		4. 提案・発信する力	◎		◎		○				○	◎		○	○		○
		5. 好奇心・探究心	◎		○		○				○	○		○			○
		6. 困難を解決しようとする心	◎		◎		◎				○	○		○	◎		◎
B. 人間関係形成	学びを深めたり、目標の達成を行ったりするために、他者と協力する資質・能力	1. 伝え合う力	◎		◎		○			◎	○		○			○	
		2. 協働する力	◎		○		○			◎	○		○	○		◎	
		3. 他者受容	◎		◎		◎			○	○		○	◎		◎	
C. 自律的活動	自分の置かれている状況や考え、感じることなどを認識し、それに応じてよりよい方向に調整しながら学びや価値観を推進する資質・能力	1. 感じ取る力	◎		◎		◎			○	○		○	○		○	
		2. 創出する力	◎		◎					○	◎		○	○		○	
		3. 自己肯定感	◎		○		○			○	○		○	◎		◎	

※各教科・領域において関連性の強い単元

国語...	おおきくなった、だからものをおしえよう、好きなことなあに、くじらぐも、しらせたいな、見せたいな、じどう車くらべ、ともだちに、きいてみよう、てがみでしらせよう、これは、なんでしよう、どぼうぶつの赤ちゃん、いいこといっぱい、1年生、こんなことをしたよ
算数...	たしざん、ひきざん、かたちあそび、おおきいかず、どちらがひろい、ずをつかってかんがえよう、かたちづくり
生活...	
音楽...	うたでなかよしになろう、はくをかかじてあそぼう、はくをかかじてリズムをうとう、おとをあわせてたのしもう
図工...	どんでんかくのはたのしいな、すなやつちとなかよし、いろいろなかたちのかみから、せんせいあのおね、おってたてたら、コロコロべったんシャカシャカ、やぶいたかたちからうまれたよ、はこでつくったよ
体育...	体ほぐしの運動、多様な動きをつくる運動遊び、走・跳の運動遊び、水遊び、ボールゲーム、鬼遊び、表現遊び
道徳...	あいさつ、ことばづかい、おせわになっているひと、ともだちのこと、じぶんのよいところ、じぶんでできること、だれにでもこうへいに、みんなのためにはたらく、わたしたちのまち、うつくしいもの
特活...	全般

【表2-2-4(1)】社会的実践力のとらえと教科・領域との関連検討表(小学校1学年版)

第2章
地域創造学の
目標及び内容

資質・能力の分類	定義	A～Cに関する各資質・能力	創造	幼児教育	国語	社会	算数	理科	生活	音楽	図工	家庭	体育	道徳	外国語	特活	
A. 社会参画力	「ひと・もの・こと」等の地域の実情を理解し、身の回りにある課題や問題を捉え、これからの地域の在り方や、よりよい社会づくりについて提案・発信する資質・能力	1. 地域理解	◎								○			○			
		2. 見通す力	◎		○		◎						○			○	
		3. 多面的・多角的に考える力	◎		○		○					○		○	◎		○
		4. 提案・発信する力	◎		◎		○				○	◎		○	○		○
		5. 好奇心・探究心	◎		○		○				○	○		○			○
		6. 困難を解決しようとする心	◎		◎		◎				○	○		○	◎		◎
B. 人間関係形成	学びを深めたり、目標の達成を行ったりするために、他者と協力する資質・能力	1. 伝え合う力	◎		◎		○			◎	○		○			○	
		2. 協働する力	◎		○		○			◎	○		○	○		◎	
		3. 他者受容	◎		◎		◎			○	○		○	◎		◎	
C. 自律的活動	自分の置かれている状況や考え、感じていることなどを認識し、それに応じてよりよい方向に調整しながら学びや価値動を推進する資質・能力	1. 感じ取る力	◎		◎		◎			○	○		○	○		○	
		2. 創出する力	◎		◎		○			◎	◎		○	○	◎	○	
		3. 自己肯定感	◎		○		○				○	○		○	◎		◎

※各教科・領域において関連性の強い単元

国語…	A4「あったらいいな、こんなもの」 B1「大きなものつたえたい」「伝えたいことを発表しよう」「こんなものを見つけたよ」
算数…	A3「かけ算九九をつくらう」
生活…	
音楽…	A5「ふしをつくらう」
図工…	
体育…	A6「水泳」「てつぼう」 B1・B2・B3「ドッチボール」
道徳…	C「だっておにいちゃんだもん」「いま、ほくにてできること」「ほく」
特活…	A6・B1・B2・B3「学校行事全般」

【表2-2-4(2)】社会的実践力のとらえと教科・領域との関連検討表(小学校2学年版)

資質・能力の分類	定義	A～Cに関する各資質・能力	創造	幼児教育	国語	社会	算数	理科	生活	音楽	図工	家庭	体育	道徳	外国語	特活	
A. 社会参画力	「ひと・もの・こと」等の地域の実情を理解し、身の回りにある課題や問題を捉え、これからの地域の在り方や、よりよい社会づくりについて提案・発信する資質・能力	1. 地域理解	◎			◎		◎		○	○			○	○		
		2. 見通す力	◎		◎	○	◎	◎					○			◎	
		3. 多面的・多角的に考える力	◎		◎	◎	◎	◎	◎			○		○	◎	○	○
		4. 提案・発信する力	◎		◎	◎	◎	◎	◎		○	○		○	○		○
		5. 好奇心・探究心	◎		○	◎	○	◎	◎		○	○		○		○	○
		6. 困難を解決しようとする心	◎		○	○	○	○	○		○	◎		○	◎	◎	◎
B. 人間関係形成	学びを深めたり、目標の達成を行ったりするために、他者と協力する資質・能力	1. 伝え合う力	◎		◎	◎	◎	◎		◎	○		○		◎	○	
		2. 協働する力	◎		○	○	○	○		◎	○		○	○	◎	◎	
		3. 他者受容	◎		◎	○	◎	○		○	○		○	◎	◎	◎	
C. 自律的活動	自分の置かれている状況や考え、感じていることなどを認識し、それに応じてよりよい方向に調整しながら学びや価値動を推進する資質・能力	1. 感じ取る力	◎		◎	◎	◎	◎		◎	○		○	○		○	
		2. 創出する力	◎		◎	○		○		◎	◎		○	○	◎	○	
		3. 自己肯定感	◎		○	○	○	○			○	○		○	◎		◎

※各教科・領域において関連性の強い単元

国語…	・進行を考えながら話し合おう「つたえよう楽しい学校生活」「ありがとうをつたえよう」・すがたをかえる大豆・食べ物のひみつを教えます
社会…	・わたしたちのまちはどんなまち・工場で働く人の仕事と農家の仕事・杉苗を育てる仕事
算数…	
理科…	・春の自然をみつけよう・チョウを育てよう・こん虫をしらべよう
音楽…	
図工…	・大好きなこん虫を作ろう
体育…	・水泳・表現
道徳…	・ツバメの赤ちゃん・ホテルの引こし・いたいたいのち・おにいちゃん、おばあちゃん、見ていてね
外国語…	・ハッピー・ハロウィン
特活…	・学習発表会

【表2-2-4(3)】社会的実践力のとらえと教科・領域との関連検討表(小学校3学年版)

2
地域創造学で
育む社会的
実践力

資質・能力の分類	定義	A～Cに関する 各資質・能力	創造	幼児 教育	国語	社会	算数	理科	生活	音楽	図工	家庭	体育	道徳	外国語	特活	
A. 社会参画力	「ひと・もの・こと」等の地域の実情を理解し、身の回りにある課題や問題を捉え、これからの地域の在り方や、よりよい社会づくりについて提案・発信する資質・能力	1. 地域理解	◎			◎				○	○			○	○		
		2. 見通す力	◎		◎	○	◎	◎					○				◎
		3. 多面的・多角的に考える力	◎		◎	◎	◎	◎				○		○	◎	○	○
		4. 提案・発信する力	◎		◎	◎	○	◎				○		○	○		○
		5. 好奇心・探究心	◎		○	○	○	◎				○		○		○	○
		6. 困難を解決しようとする心	◎		○	○	○	○				◎		○	◎	◎	◎
B. 人間関係形成	学びを深めたり、目標の達成を行ったりするために、他者と協力する資質・能力	1. 伝え合う力	◎		◎	◎	◎	◎			○		○		○	○	
		2. 協働する力	◎		○	○	○	○			○	○	○	○	◎	◎	
		3. 他者受容	◎		◎	○	○	○				○	○	◎	○	◎	
C. 自律的活動	自分の置かれている状況や考え、感じていることなどを認識し、それに応じてよりよい方向に調整しながら学びや価値動を推進する資質・能力	1. 感じ取る力	◎		◎	◎	◎	◎		○	○		○	○		○	
		2. 創出する力	◎		◎	○		○		○	◎		○	○	◎	○	
		3. 自己肯定感	◎		○	○	○	○		○	○		○	◎	○	◎	

※各教科・領域において関連性の強い単元

国語・・・	調べたことを整理して書こう(新聞を作ろう)」「本で調べて、報告する文章を書こう(私の研究レポート)」「十年後の私へ」「だれもが関わり合えるように」
社会・・・	「健康なくらしとまちづくり(ごみはどこへ)(水はどこから)」「昔から今へと続く町づくり」「わたしたちの県の町づくり」
算数・・・	
理科・・・	「水のすがたと温度」「しぜんの中の水のすがた」
音楽・・・	
図工・・・	
体育・・・	「水泳」
道徳・・・	「ふれあいの森で」「ふるさとを守った大イチョウ」岩手県版資料
外国語・・・	「ハロウィン」
特活・・・	「着衣泳」

【表2-2-4(4)】社会的実践力のとらえと教科・領域との関連検討表(小学校4学年版)

資質・能力の分類	定義	A～Cに関する 各資質・能力	創造	幼児 教育	国語	社会	算数	理科	生活	音楽	図工	家庭	体育	道徳	外国語	特活	
A. 社会参画力	「ひと・もの・こと」等の地域の実情を理解し、身の回りにある課題や問題を捉え、これからの地域の在り方や、よりよい社会づくりについて提案・発信する資質・能力	1. 地域理解	◎			◎		○		○	○			○	○		
		2. 見通す力	◎		◎	○	◎	◎					○			◎	
		3. 多面的・多角的に考える力	◎		◎	◎	◎	◎				○		○	◎	○	◎
		4. 提案・発信する力	◎		◎	◎	○	◎				○	◎	○	○	○	◎
		5. 好奇心・探究心	◎		○	○	○	◎			○	○	○	○		◎	◎
		6. 困難を解決しようとする心	◎		○	○	○	○			○	○	○	◎	◎	○	◎
B. 人間関係形成	学びを深めたり、目標の達成を行ったりするために、他者と協力する資質・能力	1. 伝え合う力	◎		◎	◎	◎	◎		◎	○		○		◎	○	
		2. 協働する力	◎		○	○	○	○		◎	○	○	○	○	◎	○	◎
		3. 他者受容	◎		◎	○	◎	○		○	○		○	◎	○	◎	
C. 自律的活動	自分の置かれている状況や考え、感じていることなどを認識し、それに応じてよりよい方向に調整しながら学びや価値動を推進する資質・能力	1. 感じ取る力	◎		◎	◎	◎	◎		◎	○		○	◎	○	◎	
		2. 創出する力	◎		◎	○		○		◎	◎		○	◎	○	○	
		3. 自己肯定感	◎		○	○	○	○		○	○		○	◎	○	◎	

※各教科・領域において関連性の強い単元

国語・・・	「新聞を読もう」「きいて、きいて、きいてみよう(インタビュー)」「次への一歩―活動報告書」「明日をつくるわたしたち(提案する文章)」「グラフや表を用いて書こう」「分かりやすく伝える」「事例と意見の関係をおさえて、自分の考えをまとめよう」「ニュース番組作りの現場から」「通信文のいろいろ」
社会・・・	「わたしたちのくらしと国土」「工業生産を支える人々」「国土の自然とともに生きる(森林を守る人々)」「くらしを支える情報」
算数・・・	「百分率とグラフ」
理科・・・	「流れる水のはたらき」
音楽・・・	
図工・・・	「じっと見つめてみると(思いが伝わるように絵に表そう)」
家庭・・・	「おいしい楽しい調理の力」「食べて元気! ご飯とみそ汁」
体育・・・	「水泳」
道徳・・・	「みんなのくらしがよくなるために」「地域みんなで助け合う」「町を元気にするために」「一ふみ十年」「親から子へ、そして孫へ」
外国語・・・	「ハロウィン」
特活・・・	「運動会」「学習発表会」「6年生を送る会を成功させよう」「5年生になって」「もうすぐ最高学年」「1年間の反省」

【表2-2-4(5)】社会的実践力のとらえと教科・領域との関連検討表(小学校5学年版)

第2章
地域創造学の
目標及び内容

資質・能力の分類	定義	A～Cに関する 各資質・能力	創造	幼児 教育	国語	社会	算数	理科	生活	音楽	図工	家庭	体育	道徳	外国語	特活	
A. 社会参画力	「ひと・もの・こと」等の地域の実情を理解し、身の回りにおける課題や問題を捉え、これからの地域の在り方や、よりよい社会づくりについて提案・発信する資質・能力	1. 地域理解	◎			◎				○	○	○		○	○		
		2. 見通す力	◎		◎	○	◎	◎					◎			◎	
		3. 多面的・多角的に考える力	◎		◎	◎	◎	◎				○		○	◎		◎
		4. 提案・発信する力	◎		◎	◎	○	◎				○	◎	○	○	○	◎
		5. 好奇心・探究心	◎		○	○	○	◎			○	○	○	○		◎	◎
		6. 困難を解決しようとする心	◎		○	○	○	○			○	○	○	◎	◎	○	◎
B. 人間関係形成	学びを深めたり、目標の達成を行ったりするために、他者と協力する資質・能力	1. 伝え合う力	◎		◎	◎	◎	◎		◎			○		◎	○	
		2. 協働する力	◎		○	○	○	○		◎	○	◎	○	◎	○	◎	
		3. 他者受容	◎		◎	○	◎	○		○	○		○	◎	○	◎	
C. 自律的活動	自分の置かれている状況や考え、感じていることなどを認識し、それに応じてよりよい方向に調整しながら学びや価値動を推進する資質・能力	1. 感じ取る力	◎		◎	◎	◎	◎		◎	○	○	○	◎	○	◎	
		2. 創出する力	◎		◎	○		○		◎	◎	○	◎	○	○	◎	
		3. 自己肯定感	◎		○	○	○	○		○	○	○	○	◎	○	◎	

※各教科・領域において関連性の強い単元

国語…	「町のよさを伝えるパンフレットを作ろう」「意見を聞き合って考えを深め、意見文を書こう」「筆者の考えをとらえ、自分の考えと比べて書こう」「登場人物の関係をとらえ、人物の生き方について話し合おう」「ようこそ、私たちのまちへ」「未来がよりよくなるために」
社会…	「日本の歴史」「暮らしの中の政治」「世界の人々とともに生きる」
算数…	「資料の調べ方」
理科…	「地球と私たちのくらし」「生き物のくらしと環境」「地球に生きる」「変わり続ける大地」
音楽…	
図工…	
家庭…	「心のつながりを深めよう」「まかせてね今日の食事」
体育…	
道徳…	
外国語…	「ハロウィン」
特活…	

【表2-2-4(6)】社会的実践力のとらえと教科・領域との関連検討表(小学校6学年版)

資質・能力の分類	定義	A～Cに関する 各資質・能力	創造	幼児 教育	国語	社会	数学	理科	生活	音楽	美術	技家	保体	道徳	英語	特活	
A. 社会参画力	「ひと・もの・こと」等の地域の実情を理解し、身の回りにおける課題や問題を捉え、これからの地域の在り方や、よりよい社会づくりについて提案・発信する資質・能力	1. 地域理解	◎		○	◎	○	○		○		○		○	◎	○	
		2. 見通す力	◎		○	○	◎	○		○	○	○	○	○	○	○	
		3. 多面的・多角的に考える力	◎		◎	◎	○	○			○	○	○	○	○	◎	○
		4. 提案・発信する力	◎		○	○	○	○			○	○	○	○		◎	○
		5. 好奇心・探究心	◎		◎	◎	○	○			○	○	○	○		○	○
		6. 困難を解決しようとする心	◎		◎	◎	○	○			○	○	○	○	○	○	○
B. 人間関係形成	学びを深めたり、目標の達成を行ったりするために、他者と協力する資質・能力	1. 伝え合う力	◎		◎	○	○	○		◎	○	○	○	○	○	○	
		2. 協働する力	◎		○	○	○	○		◎	○	○	○	○	○	○	
		3. 他者受容	◎		◎	○	○	○		○	○	○	○	○	◎	○	
C. 自律的活動	自分の置かれている状況や考え、感じていることなどを認識し、それに応じてよりよい方向に調整しながら学びや価値動を推進する資質・能力	1. 感じ取る力	◎		○	○	○	○		◎	○	○	○	○	◎	○	
		2. 創出する力	◎		◎	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○	
		3. 自己肯定感	◎		○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○	

※各教科・領域において関連性の強い単元

国語…	【随筆】空を見上げて 【書く】調べたことを報告しよう レポートにまとめる 【ノンフィクション】榎守三代 グループディスカッション
社会…	【地理】世界各地の人々の生活と環境、世界の諸地域、世界の様々な地域の調査、日本の姿 【歴史】古代までの日本、中世の日本
数学…	「比例と反比例」
理科…	
音楽…	【鑑賞】イメージをもたらす音楽の秘密、曲想との関わり 【歌唱】仲間と協力し、表情豊かな表現の工夫
美術…	
技家…	
保体…	
道徳…	
英語…	地域創造学「国際社会に生きる人として」、My Project1&2
特活…	

【表2-2-4(7)】社会的実践力のとらえと教科・領域との関連検討表(中学校1学年版)

2
地域創造学で
育む社会的
実践力

資質・能力の分類	定義	A～Cに関する 各資質・能力	創造	幼児 教育	国語	社会	数学	理科	生活	音楽	美術	技家	保体	道徳	英語	特活	
A. 社会参画力	「ひと・もの・こと」等の地域の実情を理解し、身の回りにおける課題や問題を捉え、これからの地域の在り方や、よりよい社会づくりについて提案・発信する資質・能力	1. 地域理解	◎		◎	◎	○	○		○		○		○	◎	○	
		2. 見通す力	◎		○	○	◎	◎		○	○	○	○		○	○	
		3. 多面的・多角的に考える力	◎		◎	◎	○	○		○	○	○	○	○	○	◎	○
		4. 提案・発信する力	◎		◎	○	○	○		○	○	○	○	○		◎	○
		5. 好奇心・探究心	◎		○	◎	○	◎		○	○	○	○	○		○	○
		6. 困難を解決しようとする心	◎		◎	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○
B. 人間関係形成	学びを深めたり、目標の達成を行ったりするために、他者と協力する資質・能力	1. 伝え合う力	◎		◎	○	○	○		◎	○	○	○	○	○	○	
		2. 協働する力	◎		○	○	○	○		◎	○	○	○	○	○	○	
		3. 他者受容	◎		◎	○	○	○		○	○	○	○	○	○	◎	
C. 自律的活動	自分の置かれている状況や考え、感じていることなどを認識し、それに応じてよりよい方向に調整しながら学びや価値活動を推進する資質・能力	1. 感じ取る力	◎		○	○	○	◎		◎	○	○	○	○	◎	○	
		2. 創出する力	◎		○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○	
		3. 自己肯定感	◎		○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○	

※各教科・領域において関連性の強い単元

国語…	〔話す聞く〕魅力的な提案をしよう プレゼンテーションをする 〔小説〕盆土産 〔ノンフィクション〕小さな町のラジオ発—臨時災害放送局「りんごラジオ」 パネルディスカッション
社会…	〔地理〕世界から見た日本の姿、日本の諸地域、身近な地域の調査、東北地方 〔歴史〕近世の日本、開国と近代日本の歩み
数学…	〔1次関数〕「確率」
理科…	
音楽…	〔鑑賞〕曲の構成に注目し、曲想の変化を味わう 〔歌唱〕仲間と協力し、曲にふさわしい表現の工夫
美術…	
技家…	
保体…	
道徳…	
英語…	地域創造学「国際社会に生きる人として」、My Project4 & 5
特活…	

【表2-2-4(8)】社会的実践力のとらえと教科・領域との関連検討表(中学校2学年版)

資質・能力の分類	定義	A～Cに関する 各資質・能力	創造	幼児 教育	国語	社会	数学	理科	生活	音楽	美術	技家	保体	道徳	英語	特活	
A. 社会参画力	「ひと・もの・こと」等の地域の実情を理解し、身の回りにおける課題や問題を捉え、これからの地域の在り方や、よりよい社会づくりについて提案・発信する資質・能力	1. 地域理解	◎		○	◎	○	○		○		○		○	◎	○	
		2. 見通す力	◎		○	◎	◎	○		○	○	○	○		○	○	
		3. 多面的・多角的に考える力	◎		◎	◎	○	○		○	○	○	○	○	○	◎	○
		4. 提案・発信する力	◎		○	◎	○	○		○	○	○	○	○		◎	○
		5. 好奇心・探究心	◎		○	○	○	○		○	○	○	○	○		○	○
		6. 困難を解決しようとする心	◎		◎	◎	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○
B. 人間関係形成	学びを深めたり、目標の達成を行ったりするために、他者と協力する資質・能力	1. 伝え合う力	◎		◎	○	○	○		◎	○	○	○	○	○	○	
		2. 協働する力	◎		◎	○	○	○		◎	○	○	○	○	○	○	
		3. 他者受容	◎		◎	○	○	○		○	○	○	○	○	○	◎	
C. 自律的活動	自分の置かれている状況や考え、感じていることなどを認識し、それに応じてよりよい方向に調整しながら学びや価値活動を推進する資質・能力	1. 感じ取る力	◎		○	○	○	○		◎	○	○	○	○	◎	○	
		2. 創出する力	◎		○	◎	○	○		○	○	○	○	○	○	○	
		3. 自己肯定感	◎		◎	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○	

※各教科・領域において関連性の強い単元

国語…	〔情報〕想いのリレーに加わろう 〔話す聞く〕話し合っ提案をまとめよう 課題解決に向けて会議を開く 〔ノンフィクション〕エルサルバドルの少女ヘスース 根拠を明確にして意見文を書こう
社会…	〔歴史〕二度の世界大戦と日本、現代の日本と世界 〔公民〕私たちの暮らしと現代社会、人間を尊重する日本国憲法、私たちの暮らしと民主政治、私たちの暮らしと経済、安心して暮らせる社会、国際社会に生きる私たち
数学…	〔関数 $y=ax^2$ 〕 「標本調査」
理科…	
音楽…	〔鑑賞〕曲が生まれた背景を理解し、作曲者の思いを感じ取る 〔歌唱〕仲間と協力し、曲にふさわしい表現の工夫
美術…	
技家…	
保体…	
道徳…	
英語…	地域創造学「国際社会に生きる人として」、My Project、7&8
特活…	

【表2-2-4(9)】社会的実践力のとらえと教科・領域との関連検討表(中学校3学年版)

第1節 指導計画作成の方針

地域創造学の目標は、教育課程全体を通して達成されるものであり、その指導計画は、「すみのたの教育理念」及び各学校の教育目標を達成する上で重要な役割を果たしている。したがって、地域創造学の目標を調和的かつ効果的に達成するために、その年間指導計画を、住田町内の全教職員の協働の下で作成することが大切である。

ここで示した「年間指導計画」とは、住田町教育研究所が作成した「住田町研究開発グランドデザイン」「各ステージにおける社会的実践力の系統表」「教科領域との関連検討表」に基づき作成する「単元配列表」及び各単元の目標、指導内容、時間の配当、評価などを示した「単元計画」である。年間指導計画の作成においては、次の4点について配慮することが必要であり、詳細は第3節で述べる。

- (1) 5つのステージの系統性を大切にすること
- (2) 学校間及び校種間の連携を図ること
- (3) 各教科、各領域の指導との関連を図ること
- (4) 地域創造学の特質に応じた探究的な見方・考え方を働かせること

第2節 指導計画作成の構成

第1節の方針に基づき、地域創造学の「単元配列表」及び「単元計画」の様式を全学年統一とし、一体的な推進のための構成とする。特に、単元計画は、単元で育成される12の資質・能力を明記し、学習の中での付けたい力を明らかにしている。ただし、1つの単元で全ての資質・能力を網羅するのではなく、1年間又は1つのステージの中で、12の資質・能力が螺旋的・反復的に、バランスよく育まれることが大切である。

地域創造学では、5つのステージの系統性を大切にし、育ちと学びが滑らかになることが大切である。その実現のためには(1)校内の連携 (2)異校種間の連携 (3)学校間及び校種間の連携といった3つの視点から、社会的実践力の系統表に基づき、具体的な単元配列や単元構成を行い、町内全小中学校及び住田高校が共通に取り組む年間指導計画作成する。学年ごとに単元配列をしているが、各ステージ内及びステージ間の学習内容の系統性や、学習方法の習得及び活用を検討しながら構成する。

地域創造学は、第2章第1節の目標で示されたとおり、「住田町及び近郊地域社会をフィールドにした横断的で探究的な学習活動」であり、これは住田町及び近郊地域の人・もの・ことと関わる体験活動を適切に位置付けた学習活動である。例えば地域で働く人々や、地域の文化や産業・歴史等を学習材とし、育みたい資質・能力との関連を図りながら行う活動のことである。その教材から受け身となって知識を吸収するのではなく、そこからこの地域の課題を児童生徒自身の課題として学び、学習を通して、主体性を発揮しながら社会参画していくことを可能とし、これからの児童生徒の生き方に関わる資質・能力を育成する。

また、地域環境や地域の課題を学習材としていることから、保護者や地域の方々など外部の人の協力は欠かせない。それらの方々の専門性や幅広い知識を生かすことで、より深く、幅広い学習を行うことができ、多様な大人との関わりから、人間関係形成にかかわる資質・能力の向上につながり、児童生徒が実感を伴って自己の成長を捉えることができるという大きな学びの価値をも内包している。そのために、幅広く外部に地域創造学の学習状況や成果を公表し、保護者をはじめ地域の人々からの支持と評価を得てその後の実践に生かしていくなど、学校を取り巻く地域の理解と協力を得や

2 指導計画作成 の構成

すくすることも大切である。

第3章
指導計画の
作成

第3節 指導計画の作成に当たっての配慮事項

本章第1節で指導計画作成の方針について述べたが、これを受け、本節では指導計画の作成に当たっての配慮事項を解説する。

(1) 5つのステージの学びの系統性を大切にすること

地域創造学の指導内容や評価方法等の開発に当たり、児童生徒の発達の段階に応じた資質・能力を検討することは大切であるが、社会的実践力の系統表に示しているように、1つ1つの資質能力は1年単位の短い期間ではなく、ある程度まとまった期間で育まれる。そこで、年間指導計画の作成のポイントとして、①学びの「系統性」②身につけた資質・能力の「活用」③学習材の「内容」の3つのポイントが生かされるようにすることが大切である。3つのポイントがステージ内だけではなく、例えば第1ステージの学びが第2ステージや第3ステージでも生かされるように、ステージ間においても意識された年間指導計画を作成することが重要である。さらに、異校種のまとまりである第1, 3, 4ステージは、系統性を大切にしながら滑らかな接続と豊かな学びの展開を意図した単元計画が求められる。

(2) 校種間の連携を図ること

住田町では、2つの地域(世田米地区・有住地区)に小中学校がそれぞれ1校ずつ設置されており、地域創造学の指導計画作成に当たっては、これまで以上に校種間の連携を図ることが重要である。地域創造学は、各地区内での学習に閉じることなく、住田町を学ぶという立場に立って、世田米地区の学校の児童生徒も有住地区を学び、有住地区の児童生徒も世田米地区を学ぶことの意義がある。

そこで、単元の実施前には、児童生徒が目指す資質・能力が共通であることを確認し、児童生徒の学習状況に応じた柔軟な学習活動が可能となるよう、児童生徒に実態に合わせて単元の順序や時間数に変更がある場合は共通理解を図りながら展開し、単元の実施後には児童生徒の学習の様子を協働で振り返り、授業改善に生かす連携が重要である。

3 指導計画の作成 に当たっての 配慮事項

(3) 各教科, 各領域の指導との関連を図ること

各ステージにおける資質・能力は, 1 単位時間や 1 つの単元の中だけで育まれるものではなく, 地域創造学と各教科等の学習で往還しながら発揮されて確かなものとなったり, 活用されて汎用性のあるものになったりするなど, 教育活動全体を通して育まれるものであるから, その関連を位置付けて授業改善を図る必要がある。さらに, 教科や地域創造学で育まれた資質・能力が児童生徒の全ての生活場面で総合的に働いて発揮されるように, 特別活動の各活動や学校行事等も配慮し, 年間指導計画の作成に当たることが大切である。

(4) 地域創造学の特質に応じた探究的な見方・考え方を働かせること

地域創造学の特質に応じた探究的な見方・考え方を働かせるとは, (1) 実社会・実生活のから課題を発見すること, (2) 児童生徒が各教科等における見方・考え方を総合的に活用すること, (3) 地域や人とのつながりの中で自己の生き方を問い続けるということである。つまり, 探究的な見方・考え方を働かせながら学ぶ問題解決型の学習過程の質が重要であり, 主体的・対話的で深い学びの実現につながる展開であると捉えている。

この実現のためには, 体験活動を効果的に位置付け, 児童生徒の発達段階や単元の特色などに応じて, 探究的な見方・考え方を繰り返すことができるような単元構成が大切である。

一般的な探究のプロセスは, 「問題の理解」「課題設定」「見通し」「実施」「まとめ・振り返り」のように, 定型的で一方向のものと捉えられることが多い。しかし, 実社会・実生活において問題場面やその課題解決を迫られた時, 試行錯誤を繰り返しながら, 何度も「見通し」と「実施」を繰り返したり, 時には「問題の理解」までさかのぼりながら課題を解決したりしていくことがはるかに多い。このように社会的実践力が効果的に育まれるためには, 児童生徒が「本物の教材」に触れ, 一定の手順では簡単に課題が解決しない事柄に取り組むことの楽しさを体感できるようにすることが大切である。

そこで, 地域創造学では, 児童生徒の学習の質が高まるよう, 探究のプロセスを6つに設定した。



図2 本町における探究の六つのプロセス

① 「問題の理解・現状把握」及び「課題への気付き・課題設定」

この学習過程の活動例としては、次のようなものが考えられる。

- 既に問題状況が「発生」している事象を見る, 聴く, 共感することで課題を設定する
- 状況が把握できる中から問題状況を「発見」し, 感じ取ることで課題を設定する
- 状況が把握できていない未知の事象から仮説を立てて問を「発掘」し, 課題を設定する

問題状況が既に「発生」している事象は, 多くは直感的に課題を五感で捉えられることから, 問題理解から課題の設定は比較的容易であるが, 問題状況を「発見」「発掘」しなければならない事象については, 後述する情報収集などを適切に取り入れて関

連付けるなどして、これらのプロセスを何度か往還することにより問題状況とその課題把握ができるようになる。

また、児童生徒が主体的に学ぶ姿勢や態度を育むためには、児童生徒の発達段階や、扱う学習材の性質に留意することが大切である。例えば、児童生徒にとって経験則のない学習材の場合は、教師から問や解決方法を提示し、結論まで例示することもあり得る(図1の Mode1)。また、児童生徒にとって、同じ学習材での学びが繰り返される場合には、問題の把握や課題設定、解決の見通しをすべて教師が主導するのではなく、発達の段階に応じて児童生徒が自ら取り組むことができるように工夫して学習活動を展開しなければならない(図1の Mode2~4)。課題設定については、児童生徒が探究的な見方・考え方を働かせながら、真の主体的な学習活動になるよう、教師の役割について効果的な学習過程を吟味することが大切である。

第3章
指導計画の
作成

	問い	方法	結論	
Mode1	教師	教師	教師	伝達知
Mode2	教師	教師	子ども	実践知
Mode3	教師	子ども	子ども	
Mode4	子ども	子ども	子ども	開発知

図1 子どもと教師の役割から見た課題研究のモード
(隅田学「理科教育と課題研究」から引用)

② 情報収集

このプロセスには、必要な情報を収集し、蓄積するほかに、情報収集の手段を選択することも含まれる。一般的な探究のプロセスでは、問題の理解や課題設定の後に情報収集をすることが多いが、地域創造学では、児童生徒のこれまでの学習や経験を基に、より詳細な情報を収集してから問題の理解や課題設定をすることも想定され、柔軟性のある学習過程が深い学びの実現につながると考えられる。児童生徒の学びの出発点が、6つのプロセスのどこから始めるのかは、扱う地域素材や学年・ステージ・児童生徒の実態に応じて、多様にあるため、可能な限り指導計画に反映していく

必要がある。情報収集の活動例としては、次のようなものが考えられる。

- 情報収集の手段を選択し、調べる
- 多様な情報にある特徴を見つける
- 収集した情報を整理し、より深く分析する
- 分析した情報から、確かな根拠を持って課題を焦点化する

③ 計画する・見通しを持つ

このプロセスでは、設定した課題に対して解決又は挑戦するための仮説を立て、実施に向けた計画を立てる。その際、より効率的で効果的な手段を考えたり、多様な方法から選択して計画を立てたりすることも含まれる。また、後述する「実施・改善」のプロセスで、改善するための要素が発生したときには、このプロセスに戻り、もう一度計画を作り直すことも想定している。この学習過程の活動例としては、次のようなものが考えられる。

- 情報や事象を比較したり関連付けたりして、課題解決のための手段や過程を発想する
- 発想したことを基に、解決のための実施計画を検討し、構築する

④ 実施・改善

このプロセスは、計画に基づいて課題解決に向けた学習過程である。その中で、新たな課題を見出したり、計画の見直しを図ったりすることが必要となる場合は、計画や情報収集、場合によっては課題設定のプロセスに戻ることも当然考えられる。この学習過程の活動例としては、次のようなものが考えられる。

- 課題解決に近づくために、計画した活動を繰り返す
- 計画に不足していることを付け加えて活動する
- 課題解決につながっているかどうかを、対象の立場から問い直す
- 計画を修正して(計画のプロセスに戻ってから)やり直す

⑤ まとめ・振り返り

このプロセスでは、これまで取り組んできた探究学習をまとめて発表したり、学びの価値を振り返ったりする過程を重視する。単元の終わりにこのプロセスを設定することが多いが、それは学習の終わりを意味するのではなく、次の学習や他の学習につながったり、場合によっては新たな課題を設定して、もう一度計画の立案に戻ったりすることも考えられる。この学習過程の活動例としては、次のようなものが考えられる。

- 実践の内容や成果・課題をまとめて発表する
- 実践後の自分の思いや願いを伝える
- 実践内容を振り返り、学習の成果を実感する
- 学びの意味や価値を表現する
- 新たな課題や目標を発見し、解決方法を考える

第4節 推進体制の確立

1 住田町における運営体制

学習指導要領の趣旨に沿った学習指導を展開するに当たり、教育行政、学校、教育機関、地域が一体となって組織的に取り組むことや、各学校が円滑に地域創造学を中核とした教育課程を実施するために支援するための組織が必要である。

住田町ではその役割を教育研究所が担っているが、特に地域創造学の推進に大きく関わっているのは「研究部会」「教育研究所全体会」である。本項ではその組織について解説する。

(1) 研究部会

地域創造学を中核とした教育課程の編成と実施を研究するために4つの部会を設置する。研究員は各学校の職員に委嘱する。加えて、各部会の部長は小・中・高等学校長が務め、「研究部長会」を構成する。研究部長会は、毎月1回開催し、各部会の研究状況を共有するとともに、必要事項を速やかに決定し、各研究部会の円滑な推進を図っていく。

① 学校カリキュラム検証部会

地域創造学を据えた13年間の教育課程編成に向けて、各教科・領域等における「社会的実践力」育成の在り方を分析する。そして、各教科等と地域創造学に共通している育成すべき資質・能力を明らかにした上で、住田町における教育課程を編成する。

② 学習指導検証部会

年間指導計画をもとに、地域創造学の学習指導の効果を多角的視点から工夫・改善・検証する。児童・生徒がより学びの良さについて実感を持ちながら学習が展開できるよう、特に、体験活動を伴う学習活動の指導方法の在り方や、地域との連携を促進して、より豊かで魅力ある学びを構築するための指導方法について、その過程や成

果について吟味する。

また、探究的な見方や考え方を働かせた探究的な学習過程、充実した言語活動の位置付け、異校種の指導との接続について意識した指導の工夫等についても研究を行う。

③ 評価検証部会

児童生徒の学びの価値や社会的実践力の育成について把握するため、学習過程を蓄積するポートフォリオを作成し、多角的評価のために活用することや、パフォーマンス評価を取り入れた学習者自身の振り返りについて研究する。

また、パフォーマンス評価については、指導者と学習者が目標(ルーブリック)を共有して実施する具体的な方途を検討し、学習者本人も評価の有用性を感じられるような評価の在り方を探る。

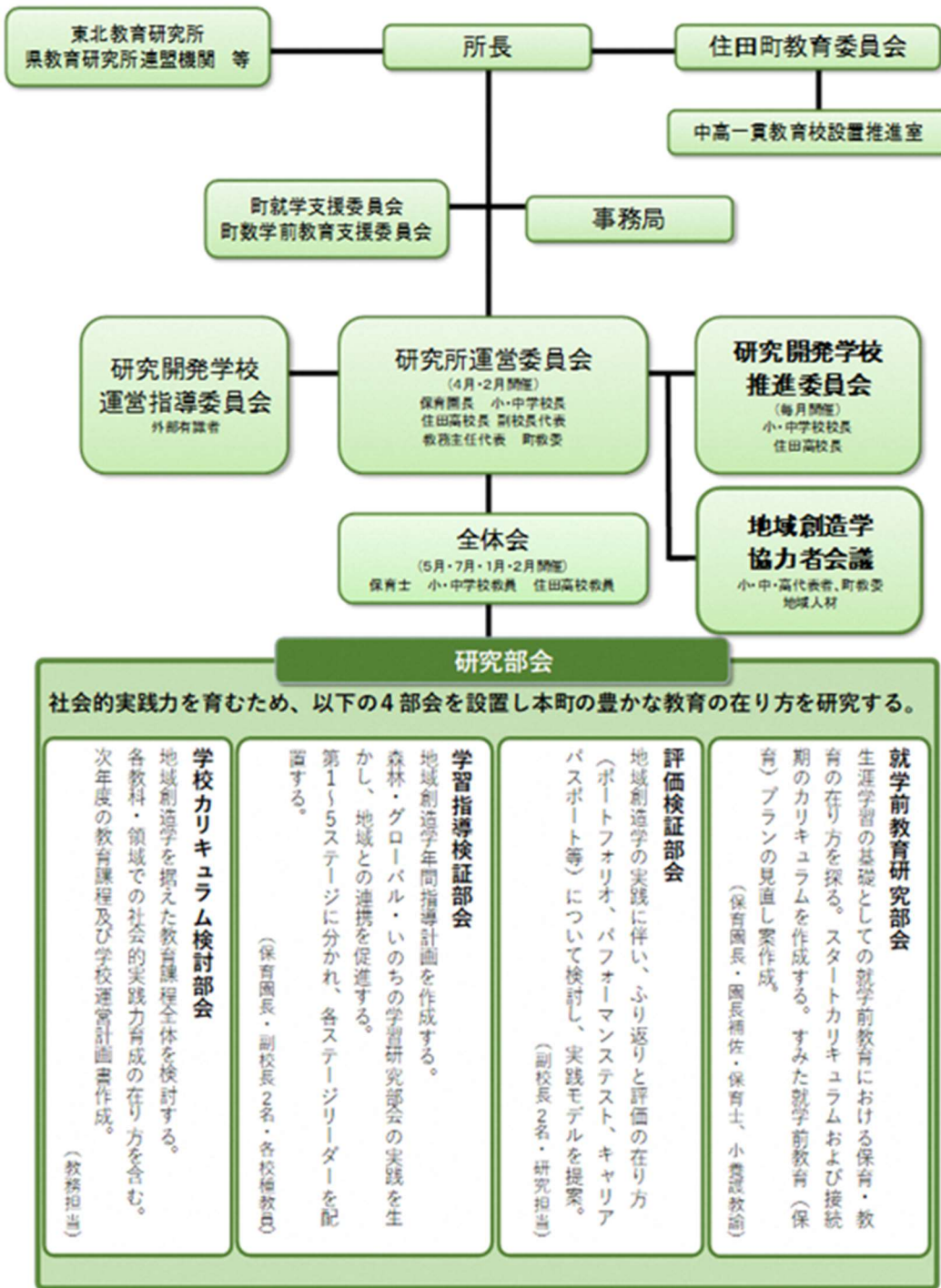
④ 就学前教育研究部会

生涯学習の基礎としての就学前教育における保育・教育の在り方や、保育園と小学校の連携について研究を行う。一貫した教育課程のスタートにあたり、「すみた幼児教育(保育)プラン」と第1ステージの資質・能力との関連を検討しながら、小学校のスタートカリキュラムとつながりのあるプランの改訂を行う。また、小学校教諭の保育体験、保育士の授業参観等の相互交流を通して、保育園と小学校の連携の進め方を研究する。

(2) 教育研究所全体会

前述の「研究部会」での研究の経過や、研究成果・課題の共通理解を図るために、4つの研究部会の報告を、全ての研究員が参加して行うものである。時間や地理的制約から普段話し合う機会が持てない同校種・異校種の教員同士が情報共有を行う場としても活用される。

4 推進体制の確立



2 各学校における推進体制

(1) 児童生徒に対する指導体制

地域創造学の授業は、年間指導計画に基づき、学級担任が自学級を直接指導する方法や、学年内の教師が指導を分担し、学級の枠を取り外して児童生徒の興味・関心などを基に学習集団を組織する方法がある。また、学年の枠も外して教師全体で指

導を分担し、課題別やコース別等で学習集団を構成する例も考えられる。

また、地域創造学では、学習活動が多様化したりすることや、児童生徒の探究が深化したりすることで、支援のために必要な教師は適宜調整して配置することが必要である。そのために、全教職員は全ての学年の地域創造学の実施の様子を十分把握しておくことが必要であることから、校内研究会等で実践の状況を紹介し合い、互いに学び合うことが、学校全体の実施状況の理解を深めると同時に、教職員の協働性を高めることにつながる。そのほか、日常の授業の公開のほか、児童生徒の学習活動の成果物を廊下に掲示したり、学級だよりの記事にしたりすること、まとめにおける発表会や中間発表会を設けるなど、日常的に目に触れるような環境整備も効果的である。

第3章 指導計画の 作成

(2) 各学校での実践を支える運営体制

地域創造学は教科・領域等を超えた横断的な学習が展開されるため、年間指導計画の作成や児童生徒に対する指導体制の構築に当たって、全教職員の協働的な取組が求められる。

また、探究的な学習の広がりや深まりによって、校外の様々な人や施設、団体等からの支援者と協力して指導を行うための連絡調整を行う職員や、指導に必要な施設・設備の調整や予算の配分・執行の役割なども必要である。加えて、校種を超えたり、他校と連携したりして授業を行う場合の連絡調整を行う役割も必要となってくる。そこで既存の組織を生かしながら、運営に当たるための校内推進委員会が必要である。校内推進委員会では、地域創造学の年間指導計画等の作成や評価、学年・ステージ・学校間の連絡や調整、実践上の課題解決や改善等を図る。また、地域創造学の実施上の共通理解を諮るとともに、校外の支援者との連携のための調整機能や、校種間の連携を密にする機能を持たせることも有効である。これら実施に向けての校内組織の整備や、教職員の実践意欲の高揚のために、校長はリーダーシップを発揮する必要がある。

第1節 児童生徒の主体性の重視

1 主体性を生み出す学習課題の設定

地域創造学では、児童生徒が日ごろから耳目に触れている住田のヒト・モノ・コトなど、住田町及び近郊地域をフィールドに学習を進めることを基本とする。これらを学習対象にすることにより、知っているつもりで終わっていたことに気付いたり、自分や家族に関わる切実な問いとして実感したりすることで、児童生徒の興味・関心は高まり、学習課題の解決に向けて自分事として取り組むことが期待される。

学習課題が自分事になることで、地域創造学の時間以外にも、何度も役場や企業等を訪問したり、地域の大人に尋ねたり、実験・観察したりするようになり、自分の考えや見通し等を進んで確かめる姿も期待される。そして、その都度、新たな発見や地域人材の助言等を得られることで、学習課題がより具体的になったり、当初描いていた学習課題のゴールは達成され、新たな学習課題が生まれたり、見通しの甘さに気づいて計画を練り直したりすることも考えられる。こうして、明確に設定された学習課題のもと主体性が生み出され、より質の高い学習展開が期待される。

これらのことをふまえ、児童生徒の主体性を生み出す学習課題としてふさわしい要件を、次のようにまとめることができる。

- ① 地域を学習材とする横断的で探究的な学習が可能であるもの。
- ② 地域創造学の探究プロセス(住田型探究的なプロセス)の中で解決が図られるもの。
- ③ 各教科等でも培われる汎用性のある資質・能力を発揮しながら考えることができるもの。
- ④ 学習の中で育まれていく資質・能力が自分の生き方を考えることにつながるもの。

1
児童生徒の
主体性の重視

第3章でも述べているとおり、地域創造学の探究プロセスとして、「①問題の理解・

現状把握、②課題への気付き・課題設定、③情報収集、④計画する・見通しをもつ、⑤実施・改善、⑥まとめ・振り返り」の場面を経ることを想定している。しかし、常に①から⑥の順番で進むのではなく、子どもの学習や生活経験、興味・関心の度合いにより、任意の番号からスタートし、各段階を進んだり戻ったりすることは、当然あり得ることである。

例えば、児童生徒に初めに体験させることで、現状を把握したり、問題に気付いたりすることで学習課題の設定に導く場合がある。その場合には、体験活動にどのような気付きが含まれるのか等、教師が明確に押さえておく必要がある。

児童生徒が、情報収集や実験・観察等をする際には、教師等が教えすぎているか、失敗を乗り越えて自分で考えるようになっているかを見極めるとともに、学習時間を多く確保することが必要である。

計画や見通しをもつ際には、人的・物的資源を基に実現可能であるのか、あるいは実現できるための条件は何か等、取組に必要な時間を考えたり、同様の事例はないか情報収集したりしながら、他者の考えも参考に客観的に見通しをもたせる必要である。

発信・提言をする際には、多面的・多角的な視点から考えられた根拠が示され、相手を意識した構成になるよう、教師は助言をしたり手立てを組んだりする必要がある。

まとめ・振り返りの際には、学習の前後での気付きや獲得した考えや知識だけでなく、周囲とのかかわりを通して、自分の生き方を見つめさせることも大切になる。

大切にしたいことは、常に「探究のゴールのイメージ」と現時点の立ち位置を確認させながら、自律的な学習にすることである。そのためには、教師等が、児童生徒が進んで情報を収集したり、自分の学習を振り返って考えたりする場面を大切に、アイデアを出し合いチャレンジしていく姿を認めながら、児童生徒に任せる部分を増やすことである。これらの学習活動を通して、児童生徒には、自分の力で学習を進めていることを実感させ、より一層の主体性を身に付けさせていきたい。

2 主体的な学びにつながる工夫

(1) 児童生徒自らが学習結果やアイデアを書き留めておく

児童生徒が体験等を行い、試行錯誤を繰り返す地域創造学では、一時間 完結の

授業になることは少なく、ある一定のまとまりの中で学習が展開される。児童生徒がより主体的に学習に取り組むためには、より具体的な計画や見通しが不可欠である。加えて、一単位時間はもとより、数時間を単位とした振り返りも必要である。振り返りでは自分の学習の進み具合とともに、自分の成長を感じることができることから、教師等には、児童生徒の取組を丁寧に見取り、フィードバックしていくことが求められる。

児童生徒の主体性を重視すると学習課題は多岐にわたることや、学習課題に応じた学びのフィールドが広がること、同じ学習課題でも児童生徒の取組過程が複線化すること、校内の学習環境だけでは対応できかねることが予想される。教師等は、地域の人的・物的資源を事前に十分把握しておき、地域の創造につながる取組や児童生徒の考えが可能な限り実現できる条件は何か等、児童生徒の学びの可能性をイメージしておくことが大切である。

地域創造学の時数は限られているため、授業中は可能な限り、児童生徒が考えたことを出し合って新しい考えを創造したり、制作や実験・観察をして考えを確かめたり、考察したりするなど、他者と協働的に取り組む有益な時間としたい。

そのためには、授業でのまとめや振り返りの他に、日常的にアイデアを蓄積する工夫も効果的である。新しいアイデアが、湯水のごとく沸々とわいてくることは稀であり、多くの場合は、しばらくの間考え続けた末に、パッと閃いたりするものである。あるいは通学途中や町内行事での一場面、自宅での会話や他教科での授業をきっかけにして、突然に思い浮かぶ時があることも考えられる。課題解決のための方策や方法等のアイデアが消えないように、その時々で何を考え、結論付けたのかを、言葉や絵、図表などに書き残しておく手立てが必要である。一般に、良い考えが浮かんだときには、誰かに話したくなったり、無性に調べたくなったりするものであることから、校内にはいつでも調べることができる環境を用意し、役場や企業等には、いつでも相談できる体制を依頼しておくことが望まれる。

このような児童生徒の取組を、学習過程に反映できるよう配慮することにより、児童生徒の学習はさらに深まり、より一層主体的な学習になることが期待される。学校では日常的に、学習の成果物を掲示し進捗状況をクラスで共有したり、学習を振り返ったりと、相互に学び合うことができるよう配慮する必要がある。他者の学習状況も参考にしながら、冷静に自分の取組を俯瞰できる自己評価力がついてこそ、次のステップがより確かな方向へと定まっていくことから、毎時間のまとめや振り返りは、非常に大切で

欠かせない取組である。

(2) 他者との関わりに重点をおき協働を必須とする

自分の考えを広げたり深めたりするためには、他者の意見が必要不可欠である。他者の見方・考え方に触れることは、自分の視野が広がったり、自分の考えの妥当性を再確認したり、修正したりすることにもつながり、他者の考え方や行動等を、自分の生き方に生かすことができる。

例えば、学んだことの成果を児童生徒が発表する場合、相手に自分の考えを伝えるために、内容や伝え方を吟味するなど、活動に対する目的意識が醸成され、相手を意識したコミュニケーション能力も磨かれることが期待される。児童生徒には、根拠を明確にした妥当性のある提案をする必然性が生じるとともに、地域の人々からは感想や助言等のフィードバックが行われ、客観性の伴ったメタ認知能力も育まれていくことが期待される。

なお、ここでの他者とは、校内の児童生徒や教職員に加え、異校種や役 場、企業やNPO等、地域で生活するすべての人々を含んでいる。特に、職種や世代等の立場を超えて考えを交流することで、自分にはない見方・考え方を取り入れることができ、やがては児童生徒の見方・考え方もより豊かになっていく。協働的な学習を重ねることで、学習内容を一層深めるとともに、児童生徒には新たな見方・考え方が加わり、課題解決や検討の視点や方法も明確になっていく。

これらのことから、他者と協働することの良さを、次の4点にまとめることができる。

- ① 新しい情報を得て、自分の情報を増やすことができる。
- ② 情報が増えたことにより、課題解決に向けて、検討の視点や方法が明確になる。
- ③ 他者の考え方や行動面等の良さを学び、自分の生き方につなげることができる。
- ④ コミュニケーション能力を高めることができる。

児童生徒にとっては、教師をはじめ、人生の先輩である大人の励ましや助言は非常に重要であり、その後の学習に向かう姿勢に大きな影響を及ぼすものである。

教師等は、共に考え共に活動しながら、児童生徒の学習進度や達成状況を見取りつつ、資料や体験等から児童生徒が自ら気付くように働きかけたり、課題解決のポイントになっているかなど、話合いの観点を意図的に示したりすることが大切である。このような学習を通して、教師等は、協働的な学習の良さを、児童生徒に自覚させ、他教科等の学習や様々な活動に実践していくことが求められる。

1
児童生徒の
主体性の重視

第2節 地域創造学の特質を生かした学習指導の展開

1 多様な学習展開(体験活動の重視、異校種の円滑な接続につながる学習)の工夫

住田には、中山間地域の自然豊かで小さな町であるがゆえの、たくさんの学習材が存在する。例えば、少子高齢化に伴う人口減少、人口減少に伴う町づくりの様子、高齢者の増加に伴う健康・福祉の取組、東日本大震災を転機とする防災意識の高まり、森林林業日本一を掲げる町の取組、保育園から始まる国際理解の取組があり、その他にも食文化や伝統文化、歴史等の学習材がある。

地域創造学では、目指す資質・能力を育むため、学びの場を校内に限定することなく、児童生徒の学習課題に応じた体験等を取り入れた学習、役場や企業等の多くの地域人材が積極的に関わる学習等、多様な学習活動を展開することを想定している。どのような学習展開であっても、全てを児童生徒に任せることなく、教師等の適切な指導が必要である。

多様な学習活動が展開される共通点として、次の4点が考えられる。

- ① 地域人材との交流や体験等の位置づいた学習が展開されること。
- ② 児童生徒の学習課題に応じた複線的な学習過程が組み立てられること。
- ③ 児童生徒の学習展開に応じた学習過程が組み立てられること。
- ④ 各ステージの特性を生かした学習が展開されること。

地域創造学では、地域をフィールドに、児童生徒の学習課題に基づいた学習が展開されるため、同じ学習材や体験等でも、児童生徒一人一人の課題意識は異なり、追究の視点や方法も当然異なってくる。また、地域人材から、専門的な話を聞いたり助言をいただいたりするが、その内容や助言の時期によって、さらには、どのような手段で追究していくのか(体験や実験、調査や討論会等)、どのように学習成果を発信・提言していくのか(成果物の発表や配付、行事の企画等)によっても、その後の学習展開が異なってくる。体験等の効果を高めるために、最初に体験等をさせて問題に気付かせたり、体験等の前に十分な情報収集をさせ児童生徒の興味・関心を高めたり、事後に一人一人の気づきを言語化して共有したりする方法が考えられる。一人一人の体験等の内容や時期が異なることも考えられるため、教師等は、児童生徒の進捗状況を

絶えず確認しながら、振り返りと見通しを大切にしながら、適切な助言を続けていくことが大切である。そのためには、地域創造学をサポートする地域人材との日常的なつながりが絶対に欠かせない。

児童生徒が学習に主体的に取り組み、成就感を高めるためには、学校では、可能な限り指導者を教室に複数名配置して、児童生徒の多様な学習展開をサポートできるように配慮するとともに、各教科等の学習で身に付けた力を総動員して取り組ませることや、児童生徒がこれまでの学習の積み重ねを活用できるよう配慮することが求められる。

ステージ後半には、大人社会でも解決困難である今日的な課題を学習対象とし、地域の大人と継続して議論を交わしたり、共に活動をしたりしながら、様々な価値が交錯する現代社会を踏まえて、多面的・多角的に思考し、根拠を示しながら価値判断を行う体験等の学習活動が考えられる。

また、校種や学年を超えた共同体験や各ステージを超えた学習成果の交流、役場や企業、地域社会と共に実践していく活動等、児童生徒の成長を期して教師側が意図的に計画する学習展開も考えられる。そのためには、各ステージ相互の学習内容や学習方法を把握しておくことが必要になり、校種や各ステージを越えた教員等の日常的なつながりや情報交換が求められる。

2 他地域や類似の事例にも学ぶ

地域創造学は、住田及び近郊地域をフィールドに学習するが、住田でみられる事象には、日本各地に共通する課題もあることから、国内や世界の事例からヒントを得るなど、視野を広げて住田を見つめることも重要である。発達段階に応じて、他地域の事例は、なぜ成功したのか、住田との共通点や相違点は何か、住田に生かせることは何か、住田の強みは何かなど、他地域の事例から、住田の良さに気付いたり、郷土への愛着が育まれたりすることも期待される。

多くの地域が抱える今日的な課題は、人口や開発、技術革新などの様々な社会的要因が複雑に絡み合っていることが多く、解決が難しい問題である。住田の事例を通しながら、国内や世界の様子を重ねて学ぶことは、児童生徒の視野を広げたり、思考を深めたりすることにもつながってくる。

3 多様な考えを生かす言語活動

地域創造学は、様々な他者との協働的な取組の中で学習が展開され、各教科等における見方・考え方も最大限働かせながら学習課題を追究していく。様々な他者と、相互の考えを理解し合いながら学習を進めるためには、発達段階を踏まえながら各ステージでの充実した言語活動が必要であり、具体的には、他者と伝え合ったり協力したりする場面、多面的・多角的に考える場面や提案・発信する場面、学習の振り返りや自己の在り方を見つめる場面等があげられる。

これらの場面では、児童生徒に、事実を正確に理解し他者に分かりやすく伝えることや、伝え合うことで自分や集団の考えを発展させること等を意識して取り組ませたい。このことにより、多面的・多角的に考える力や協働する力、創出する力、他者受容の姿勢等が身に付いていくことが期待される。

教師が児童生徒に意識させたい言語活動の在り方を、次の5点にまとめることができる。

- ① 情報を正確に取り出し、目的や意図に応じて事実等を整理できること。
- ② 事実等を自分の知識や経験等と結び付けて解釈し、自分の考えをもつこと。
- ③ 意見と根拠、原因と結果等の関係を意識し、表現を工夫しながら、相手に伝えること。
- ④ 様々な考えの異同(根拠や条件等)を整理して、自分や集団の考えを発展させること。
- ⑤ 相手の思いや考えを理解・尊重し、状況に応じて的確に反応できること。

第1ステージでは、身近な「ヒト・モノ・コト」に焦点をあてた、社会を「知る・分かる・親しむ」体験活動を多く実施し、そこで気付いたこと・感じたことを表現し合う学習活動が想定される。特に、保育園児や低学年児童は、家庭環境等による生活経験に差があることから、共通の学習基盤を作る必要があり、意図的に学習対象に出合わせ、交流させることが必要である。第1ステージでは、次の点に留意して意見交換をさせたい。

- 主語と述語を明確にして、自分の思いや考えをまとめ、発表し合うこと。

- 比較の視点(大きさ、色、形、位置等)を明確にして表現すること。
- 自分の経験と結び付けたり、判断と理由の関係を明確にしたりして表現すること。
- 話題に沿って話合うこと、互いの良いところを見つけて感想を伝え合うこと。

第2ステージでは、前ステージの成果を生かしながら、より踏み込んだ言語活動に取り組みたい。

例えば、体験等の前には十分な情報収集を行い、視点に沿ってまとめたり、既習事項やこれまでの生活経験等を交流しながら予想等を立てたり、体験等の後には気付きや現時点での考えを交流したり、予想等の検証を行って新たな考えを構築したりして、学習課題のゴールに向かわせたい。第2ステージでは、次の点に留意したい。

- 考えの共通点や相違点を整理し、話合うこと。
- 判断と根拠、原因と結果の関係を明確にして表現すること。
- 「例えば」「もし」等の条件文を使用して表現すること。
- 学んだ専門用語や概念を活用して、表現すること。

第3ステージでは、これまでの学習の成果を生かしながら、発表の仕方を意識した言語活動に取り組みたい。特に、互いの立場や意図を明確にして、資料を活用したり、根拠を明確にしたりして、相手に伝わるように表現を工夫したい。第3ステージでは、次の点に留意したい。

- 演繹法や帰納法等の論理を用いて表現すること。
- 規則性や決まり等を用いて表現すること。
- 互いの立場や意図を明確にして、意見交換すること。
- 学習した内容について、方法などを吟味して表現すること。

第4ステージでは、これまでの学習の成果を生かしながら、情報収集や体験等の内容を十分に吟味させ、課題解決のために複数の方法が考えられる中で、なぜその方法(行動)がよいと考えるのか等を、理由付けしながら説明できるようにしたい。判断する際には、効率や効果、優先順位などの様々な条件を踏まえていることから、児童生

徒の視野を広げ、思考を深めるためには有効な手段となる。第4ステージでは、次の点に留意したい。

- 相手が納得できるように、相手を意識した説得力のある表現をすること。
- 相手の複数の質問にも、根拠を示しながら答えることができること。

第5ステージでは、これまでの学習の成果を生かしながら、さらに提言・発表の質を高め、役場や企業等と政策等について、議論や討論会ができることを目指したい。第5ステージでは、次の点に留意したい。

- 現代社会で必要とされる実用的文章の内容を理解し、自分の考えをもって表現すること。
- 現代社会でみられる問題等について、提言や根拠等を示しながら議論等ができること。

このように、各ステージに応じて、児童生徒が思考したことを言語化し、発表・意見交換といった交流を組み合わせながら相互に共有したり深めたり、支援したりすることができる。言語活動を通して、自分の発表に対して他者からコメントをもらうことは、相手に自分の伝えたいことが伝わっているのか、自分の考え方は妥当なのかなど、客観的な評価を得ることにもなるため、学習の方向性を確かなものにし、自分の考えの修正を図って深めたりしていく機会になる。

併せて、支持的学習集団の風土のもと、学習対象に対して共感的な理解を示し、関心を持ち続ける姿勢や、自分がどのように関わっていけばよいか考え続ける姿勢も、言語活動の充実を支える重要な要素である。

各ステージで取り組みたい言語活動は、次の表にまとめられる。

ステージ	各ステージで位置付けたい効果的な言語活動
第1	<ul style="list-style-type: none"> ○ 主語と述語を明確にして、自分の思いや考えをまとめ、発表し合うこと。 ○ 比較の視点(大きさ、色、形、位置等)を明確にして表現すること。 ○ 自分の経験と結び付けたり、判断と理由の関係を明確にしたりして表現すること。 ○ 話題に沿って話合うこと、互いの良いところを見つけて感想を伝え合うこと。
第2	<ul style="list-style-type: none"> ○ 考えの共通点や相違点を整理し、話合うこと。 ○ 判断と根拠、原因と結果の関係を明確にして表現すること。 ○ 「例えば」「もし」等の条件文を使用して表現すること。 ○ 学んだ専門用語や概念を活用して、表現すること。
第3	<ul style="list-style-type: none"> ○ 演繹法や帰納法等の論理を用いて表現すること。 ○ 規則性や決まり等を用いて表現すること。 ○ 互いの立場や意図を明確にして、意見交換すること。 ○ 学習した内容について、方法等を吟味して表現すること。
第4	<ul style="list-style-type: none"> ○ 相手が納得できるように、相手を意識した説得力のある表現をすること。 ○ 相手の複数の質問にも、根拠を示しながら答えることができること。
第5	<ul style="list-style-type: none"> ○ 現代社会で必要とされる実用的文章の内容を理解し、自分の考えをもって表現すること。 ○ 現代社会でみられる問題等について、提言や根拠等を示しながら議論できること。

地域創造学では、未来を創造していくことができる力を求めているが、この力は、一朝一夕には身に付かないものである。だからこそ、意図的・計画的に学習対象と出合わせて疑問や気付きを持たせて学習の原動力にしたり、KJ法やウェビング法に代表される「書く、つなげる、まとめる」等の言語活動を取り入れたりして、児童生徒の思考を可視化し、他者と意見交換を重ねて、よりよい考えが構築されるように努めることが重要になる。

充実した言語活動が行われるためには、児童生徒一人一人が自分の考えを持っていることが大前提となる。児童生徒が相互の考え方を分かり、考えを持つことができるようにするため、思考ツールを活用する等して、意図的に鍛えていく必要がある。

思考ツールは、情報を可視化し操作しやすいことから、児童生徒の話合いが活発

になり、新しい考えや方法等を生み出すことが期待される。また、自他の考えが可視化され、融合されて新しい考えが生み出されていく過程は、自分の考えをメタ認知することにも役立つものである。

教師等は、発達段階に応じて適切な思考ツールを使用させ、その効力感を児童生徒に感じさせることが大切である。第1ステージから第3ステージまでは、場面に応じて適切な思考ツールを経験させ、第4ステージからは、児童生徒が思考ツールの特徴を理解し、自分で選択して使えるようにしたい。さらには、ゆくゆくは、思考ツールを用いずとも、自らの頭の中で思考操作を行うことができるようになることを目指す。

各ステージで取り組みたい思考ツールは、次の表にまとめられる。

ステージ	各ステージで挑戦したい思考ツール(例)	
第1	ベン図 ブ레인ライティング ウェビング法	ホワイトボードでの整理分析
第2	Yチャート Xチャート ビフォー・アフター KJ法	
第3	メリット・デメリット ピラミッド・チャート SWOT分析	
第4	生徒が選択して活用する	
第5	生徒が選択して活用する	

4 家庭や地域社会との連携による指導

地域創造学は、様々な体験等を含んだ多様な学習活動や学習形態が展開されるため、家庭や地域社会との連携の在り方は非常に重要である。連携する際のポイントとして、次の4点が考えられる。

- ① 教師と地域が、授業のねらいと育てたい資質・能力のイメージを具体的に共有しておくこと。
- ② 教師と地域が、綿密な事前打合せを行い、互いに関わる役割を確認しておくこと。
- ③ 教師と地域が、学習の前後において、児童生徒の学びの現状を共有すること。
- ④ 地域の大人同士が共通の思いや願いでつながっていること。

学校は一年間の学習の見通しや 12 年間の学習のつながり、各ステージで児童生徒に身に付けたい資質・能力のイメージについて、家庭や地域社会と具体的に共有

することが必要である。そのうえで、単元指導計画や単位時間の授業の様子を家庭や地域に伝えたり、今後の予定を知らせたりすることにより、家庭や地域からの感想や意見、学習への協力の申し出等をいただき、児童生徒の学習のさらなる充実につなげることができる。地域の人々を含んだ他者との交流により、児童生徒の視野や思考には、広がりや深まりがみられ、目的意識やコミュニケーション能力の高まりも期待できる。

一般に、児童生徒が校外の体験や調査等の活動には、高い学習効果を期待できるが、多くの時間を要するため、日常的に継続して実施することは難しい面がある。しかし、児童生徒が出かけること以外にも、地域の人々が何度も学校に出向くことで、校外に出かけることと同様の学習効果を効率的に得ることができる。例えば、児童生徒が学習の見通しや計画を立てる際に、教室で見守りながら助言を与えたり、児童生徒が行政や企業等に提言・発信したことに対して、行政や企業等が学校を訪問して回答したり、議論したりすることも考えられる。これらの場合には、教師と地域が、綿密な事前打合せを行い、互いに関わる役割を確認しておくことや、学習の前後における児童生徒の学びの現状を共有することが非常に重要である。

各ステージで育てたい児童生徒の姿を家庭や地域と共有し、その学びの成果を共有することにより、地域の人々の授業への参画意識も一層高まることが期待される。また、役場や企業等にとっても、授業に参加することを通して、多様なアイデアを得ることができたり、職員の意識にもプラスの変化が見られたりすることなども期待できる。

このように、児童生徒が地域をフィールドに学習を進め、校内の学びの成果を地域に発信するだけでなく、地域が学校と日常的に共に考え共に創る協働型の学習は、児童生徒だけではなく地域も共に育っていく営みとなる。

そのためにも、学校は通信等で保護者に学習の過程や成果、予定等を伝えるだけでなく、Web上でも情報の発信を積極的に行ったり、公民館等に地域創造学コーナーを設けたりして、いつでも、どこでも、誰でも地域の人々が取組の様子を分かるようにしておくことも必要になる。また、地域コーディネーターを配置し、校内の担当教員と連携するなど、児童生徒の学習について、育てたい資質・能力の具体的イメージのもと、地域の大人同士が強力につながっていることも児童生徒の地域創造学の充実という面で欠かせない。

第1節 評価の基本的な考え方

学習評価は、「どのような力が身に付いたか」という児童生徒の学習の成果を的確にとらえた上で、教師の指導改善を図ることと、児童生徒が自らの学びを振り返って次の学びに向かうことができるようにすることに生かされるものである。

地域創造学は、自分たちの歴史や文化、現状や抱えている課題等の理解を基に、協働的な学習の中で物事を広い視野から多面的・多角的に考え、ふるさとに愛着を育みながら、町の発展・創造に関わる自分の役割や自分の生き方について考えを深める学習の積み重ねである。よって、横断的で探究的な学習活動を通して、児童生徒に育みたい資質・能力が相互に関連付けられながら育成される。そしてそれらの資質・能力は、将来、未知の状況において活用することができる力であり、社会の中で生きて働く資質・能力として発揮されるという特質がある。このことを踏まえ、児童生徒の学習状況を評価し、児童生徒一人一人がどのように成長しているのか、目指す資質・能力が確実に育成されているかどうかについて、横断的で探究的な学習活動全体を通して捉えることが重要である。

同時に、単元のまとまりの中で、児童生徒が学習の見通しを立てたり、学習したことを振り返ったりする場面(自己の学びを省察、調整、更新すること)を適切に位置付けながら、児童生徒の学びのよさや進歩の状況について、児童生徒自身が実感できるようにすることが欠かせない。教師が積極的に児童生徒の努力を認めたり、励ましたりするなど、学びの価値付けを行い、成長の様子を見守りながら、児童生徒が自分自身の成長やあるべき姿を実感し、学び続けようとする意欲や態度の涵養を図ることにつながる評価がふさわしい。

そのため、児童生徒の学習状況の評価は観点別学習状況の評価を基本とするが、数値的に評価することはすぐわず、児童生徒一人一人にどのような資質・能力が顕著に身に付いたかを具体的に文章で記述する個人内評価で把握する。そして、児童生徒一人一人の学習の成立を促すための評価という視点を一層重視し、教師が自らの指導のねらいに応じて授業の中で児童生徒の学びを振り返り、学習や指導の改善に生かしていくという、指導と評価の一体化となるサイクルを大切にするとする。

したがって、各教科等における学習評価の考え方と同様に、地域創造学においても、児童生徒の学習改善につながるものにしていくこと、教師の指導改善につながるものにしていくこと、評価方法についても妥当性・信頼性のあるものか絶えず見直していくことという学習評価の基本的な考え方を踏襲しながら進めていく。

1
評価の基本的
な考え方

第2節 評価の方法及び工夫

地域創造学における児童生徒の具体的な学習状況の評価については、観点別学習状況の評価を基本とした個人内評価である。児童生徒の具体的な学習状況の評価については、多様な評価方法による評価の信頼性や妥当性を高めることと学習状況の過程を評価することに配慮して行う。

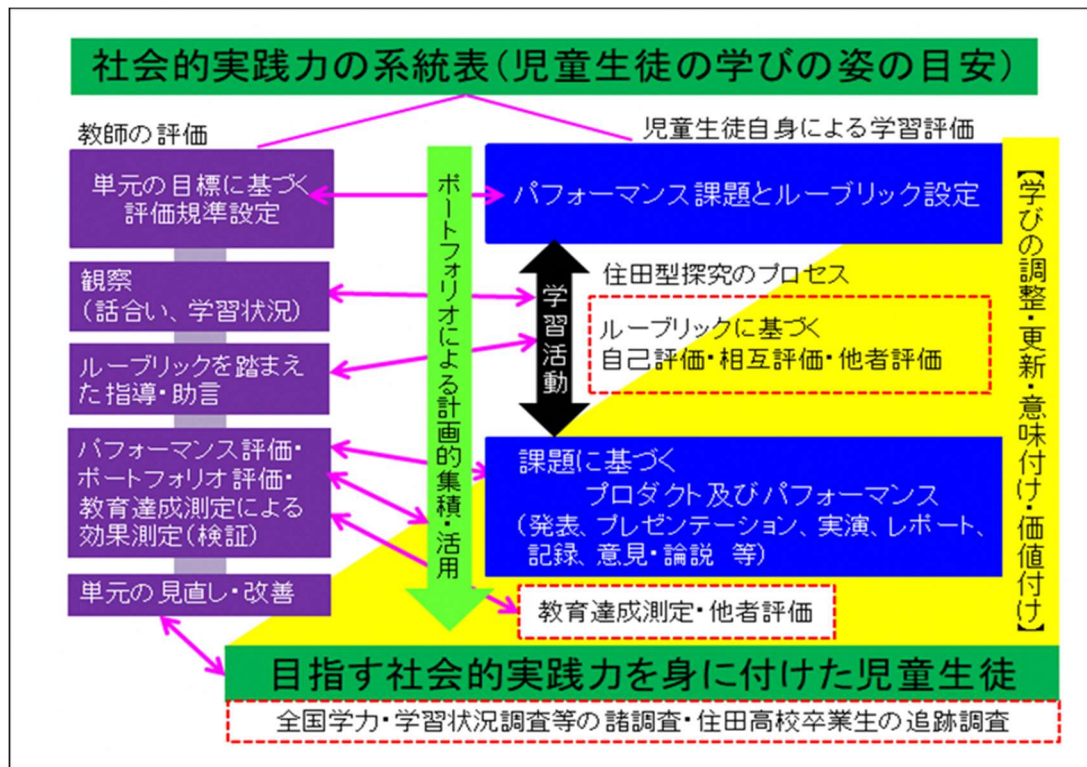
地域創造学では、児童生徒の横断的で探究的な学習活動のプロセスを住田型探究プロセスとして規定している(P 参照)。これは、6つの探究過程を土台とした学習活動の展開を想定しているもので、この住田型探究プロセスは地域創造学で育成を目指す資質・能力の育成の鍵である。

また、児童生徒の発達を視座におきながら、5つのステージのまとまりで目指す資質・能力の確実な育成に向け、その系統性を明らかにしている。社会的実践力の系統表は、発達段階に応じた児童生徒の学びの姿の目安として整理していることについては前述の通りである。

前項に述べた学習評価の基本的な考え方に基づき、児童生徒自身による学習評価と、教師の評価という二つの側面から、地域創造学においても、社会的実践力を確実に育成するために、評価の信頼性や妥当性を高めるための多様な評価方法と学習状況の過程の適切な評価の実現を目指す。

まず初めに、児童生徒の学習単元と社会的実践力の系統表を基に、児童生徒の学習単元における目標設定を行い、具体的な児童生徒の学習過程を想定しながら、評価の観点や評価規準の設定を行う。これを土台通して、児童生徒にとってのパフォーマンス課題やルーブリックを分析・検討し、設定する。

これらが地域創造学における学習評価の出発点となる。【図5-2-1】に地域創造学での学習評価の考え方を示した。



【図5-2-1】地域創造学での学習評価の考え方

1 児童生徒自身による学習評価

児童生徒にとって意味のある学習活動を展開するには、児童生徒が自らの学びを振り返って次の学びに向かうことができるようにすることが重要であり、自己評価の力を高めていくことが大切である。

そのためには、教師による単元の目標と評価規準の設定を踏まえ、児童生徒が教師とともに明確な目的意識のあるパフォーマンス課題とルーブリックを共有し、学びの方向性を見通すことが学習の出発点となる。

パフォーマンス課題とは、地域資源を学習材として、様々な視点から検討して設定した学習課題であり、学習を通して得た知識やスキルを使いこなしながら納得解や最適解を見出し、解決する課題である。具体的には、成果物や完成作品などのプロダクトや、プレゼンテーションやスピーチ、協働での問題解決、実演といったパフォーマンスを評価する課題を指すものである。

パフォーマンス課題の解決に向けて、学習の進捗状況や達成の度合いを示す尺度がルーブリックであり、児童生徒は絶えずこれに基づき、自己の学びを省察する。評

価値カードや学習記録などによる自己評価や児童生徒同士による相互評価、教師による他者評価を通して、課題解決に向けて、自己の学びをよりよいものにしようと調整したり更新したりする。

これらの学習活動においては、児童生徒の学習の過程や成果等の記録を計画的にファイルに集積する手立てが有効であり、児童生徒の学びの省察方法としてポートフォリオを積極的に活用する。ポートフォリオは、自分が得た情報や学習内容を自ら整理しながら集積し、学びの足跡が明確に捉えられることから、児童生徒自身が自分の学習を自覚的に展開することが可能である。

併せて、児童生徒が感じている学習の達成感や満足感、自己効力感等測定する方法として、住田町教育達成測定を開発した。この教育達成測定とは、社会的実践力の育成を測る一つの手段として、12 の資質・能力それぞれについて測定項目を設定し、質問紙形式で測定するものである。【表5-2-1】

これらの測定項目は、児童生徒の具体的な学習後の学びの姿を記述していることから、児童生徒自身が自分の学習の成果や心情・態度を実感的に振り返り易いだけでなく、教職員全体で児童生徒の目指す姿を具体的に共有することも可能となり、教師の見取りの視点ともなり得るものである。

横断的で探究的な学習活動の質をよりよいもの向上させるためにも、児童生徒自身が積極的に学習に自我関与しながら学びを省察する意義は大きいものであり、この過程の中で学びを調整したり、更新させたり、意味付けや価値付けをしたりする資質・能力も鍛えられていく。同時に、自ら考えたい、解決したい、力を発揮したいといった学びに向かおうとする態度や意欲も培われていくのである。

- (5) 【一つずつ選んでください】次の1～12の項目について、現在のあなたは、どの程度当てはまりますか。当てはまると思った数字一つにマークしてください。
※このアンケートは、学習の成績には関係ありません。

		まったく当てはまらない	当てはまらない	どちらとも言えない	当てはまる	よく当てはまる
1	地域に関する学習は、自分に役立っていて、「地域は大切だ」と思うようになり、地域が好きになった。	○	○	○	○	○
2	自分たちの地域には、どのようなよさや問題があるのかを見つけて、問題の解決のために見通すことができる。	○	○	○	○	○
3	地域のことについて正しい情報をもとに、自分の考えがふさわしいかどうかを、その理由も明らかにしながら考える。	○	○	○	○	○
4	地域のためになることをあれこれ考えたり、生み出したりして提案や発信ができる。	○	○	○	○	○
5	地域のことについてもっと知りたい、調べたいと思うことがたくさんある。	○	○	○	○	○
6	思った通りに進まないことがあっても、あきらめないでやりとげようとする。	○	○	○	○	○
7	自分の意見を積極的に言ったり、仲間の意見をよく聞いたりして、仲間とコミュニケーションをとることができる。	○	○	○	○	○
8	目標の達成に向かって、仲間と協力して活動することができる。	○	○	○	○	○
9	仲間の考えには、役立つ意見やよりよい考えがあるので、自分にとって仲間の存在は必要だと思う。	○	○	○	○	○
10	目標の達成に向けて、自分の取組の進み具合を確かめることができる。	○	○	○	○	○
11	伝えたいことが効果的に伝わるように、いろいろな表現の仕方を考え、その中からふさわしいものを選ぶことができる。	○	○	○	○	○
12	自分の役割を果たしながら、仲間とともにこれからもいろいろなことに挑戦しようと思っている。	○	○	○	○	○

【表5-2-1】教育達成測定 質問紙

なお、本測定は、町外の協力校(小～高)の児童生徒の調査結果と比較しながらより客観的に分析を行うものとしている。

2 教師による評価

児童生徒自身の学習評価の根底にあるものは、何よりも教師側の目標分析による評価の観点や評価規準の設定である。児童生徒任せにするのではなく、教師は絶えず、学習展開に沿って、児童生徒の思考や判断を引き出すところ、指導すべきところを明確にしなが、児童生徒の学習状況に応じて、それらを見極め、目指す資質・能力の育成に向けた適切な評価と指導をすることが求められる。児童生徒の学習活動が停滞していたり、散漫になっていた場合には、児童生徒に応じた手立てを講じて、児童生徒の資質・能力が発揮され、鍛えられていくよう、支援を行う。

併せて、教師自身もまた児童生徒と単位時間等、まとまりのなかでの児童生徒の記

録を集積する。パフォーマンス課題の達成状況や成果等を評価するパフォーマンス評価と、ポートフォリオ評価や心理測定尺度、事後アンケート等を組み合わせて、児童生徒の形成的評価を行うとともに、指導改善の視点からパフォーマンス課題やルーブリックの検証を含めた単元の見直しや改善を進めていくことが重要である。成果物や完成作品等のプロダクトの出来映えを評価するのではなく、児童生徒がどのような探究的な学習活動を通して学んだのかという教師側の見取りが不可欠である。

また、一定のまとまりや期間の中で、児童生徒の社会的実践力がどれだけ身に付いたのか、という視点も求められる。単元ごとの学習評価をもとに、単元を超えた児童生徒の成長の様子を見取る観点も取り入れることがふさわしい。多様な評価方法を組み合わせながら、真正な評価の実現につながるよう、信頼性や妥当性のある評価の実現に努める。そして、ステージ毎の子供の学びや成長の様子について、町内の全教師による校種を超えた一体的な評価活動により検証を進めていくことが効果的である。

第3節 指導改善に生かす工夫と留意点

第一に、地域創造学の特性から、児童生徒の学習活動は固定的なものではなく、学習状況に応じて複線型の学習展開になるなど、非常に弾力的であることが想定される。したがって、パフォーマンス課題やルーブリックは、それまでの実践を踏まえつつも、地域創造学で育成を目指す資質・能力が身に付いているかどうかを見る目的に立つて、柔軟性のあるものとして規定する配慮が必要である。

第二に、ポートフォリオは、学習状況の結果のみを評価するものではないことに留意が必要である。ポートフォリオは、学習の足跡となる学習過程の集積により、成長の様子を捉え、数値では網羅できない面を見取る形成的評価であり、教師も児童生徒も評価対象とするものである。よって、やみくもに資料や学習カード類を集積するものではないこと、単なる記録としてとどめるものではないことは言うまでもない。学習過程を評価する手立てとして、学習の中で適切に活用していくことが必要である。設定しているパフォーマンス課題の解決に向け、学習したことを基に自己の学びの足跡通して残す意味のあるものを児童生徒自身が選んで整理する必要がある。教師は、そのような場面を一単位時間の終わりに位置付ける場合、学習活動のまとまりの最後に位置付ける場合など、学習展開において適宜そのような場面を位置付けることが大切である。

ポートフォリオを児童生徒自らが創り上げていくことを通して、自分自身の学習を省察する目が鍛えられ、地域創造学で育成を目指す自律的活動に関する資質・能力の育成につながる。なぜこれが今の自分の学習にとって必要なのか、意味のあるものなのかという観点から捉え直したり、更に必要な情報はないか、次の学習はどのように取り組めばよさそうかといった自己の学びを調整したり更新したりする力が育つ。同時に、学習後には達成感や満足感、学びがいや自己効力感等を味わいながら、自分の学びの成果を自覚することに役立つ。つまり、メタ認知に関わる感じ取る力や自己肯定感といった自律的活動に関する資質・能力もより一層育まれていく。

ポートフォリオは児童生徒自らが辿った学習の軌跡であるとともに、学びの成果そのものとして、そして評価の妥当性を高めるものとして機能するのである。このような活用により、児童生徒自身が「ポートフォリオは学習に役立ち、有効なツールである」と認識し、使いこなしていくことが望まれる。

第三に、多様な評価方法による検証という側面を充実するよう配慮する。

具体的には、二点について挙げられる。

一点目は、全国学力・学習状況調査の分析等において探究のプロセスを意識した学習活動に取り組んでいる児童生徒ほど、各教科の正答率が高い傾向にあることが明らかになっていることから、社会的実践力の育成の汎用性を踏まえ、全国学力・学習状況調査、岩手県小・中学校学習定着度状況調査、岩手県中学1年制英語確認調査(CAN-DO テスト)、岩手県中学校新入生学習状況調査、岩手県高等学校1年・2年基礎力確認調査といった諸学力調査結果に基づく社会的実践力の育成に係る分析を行う。

二点目は、12年間の教育課程編成に基づく社会的実践力の育成は、将来社会の中で生きて働く資質・能力として発揮される資質・能力であることから、学びの最終段階である住田高校の卒業生について、教育達成測定や事後アンケート等を用いながら、進学・就職状況と併せて追跡調査を行う。よりよい自分自身の生き方を志向しながら、自分の役割や地域への貢献について思考・判断し実践していこうとする心豊かな人材の育成について定量的に評価していく。

